

「宣伝政党」ドイツ社会民主党と 風刺漫画雑誌『真相』

佐藤卓己

【要約】 今日なお社会主義大衆組織政党のモデルと見做されるSPD（ドイツ社会民主党）は、第一次大戦前には百万黨員を擁する巨大組織に成長したが、その発展を条件付けた機関紙活動の実態と意義については必ずしも十分な説明が与えられていない。本稿は「幹部政党」から「大衆組織政党」への過渡的形態として第二帝制期SPDを「宣伝政党」と規定し、その発展の意味を労働者層で異常なまでの人氣を博した風刺漫画雑誌『真相』の分析を通して考察する。『真相』の成功は大量複製化時代の初期、つまり都市労働者の組織化を推進した「宣伝政党」期、という時代に限定されており、SPDの宣伝が組織内向化する第一次大戦前夜には、その役割を終えて急速な読者離れが生じた。つまり大衆社会の形成期に、伝統的「教養」を平準化するマス・メディアの積極的な採用によって情報環境を組織し、大衆文化、つまり「宣伝」を創出したことに、SPDの発展要因があり、第二帝制期という時代の拘束の中でSPDは大衆政治に新しい地平を開くことになったと言えるよう。

史料 七〇巻一号 一九八七年一月

はじめに

一枚の三コマ漫画がある。一九一〇年ドイツ社会民主党（以下SPDと略記）の風刺漫画雑誌『真相』^① Der Wahre Jacobに載った「理論と実践」（イラスト^②）と題する風刺漫画は、百万黨員へ躍進する大衆組織政党の栄光の自画像であった。

第一コマ「巨大な怪獣「資本主義」をR・ルクセンブルク、K・カウツキー、F・梅林グたち「急進主義者」は正面から、G・ベルンシュタイン等の「修正主義者」は背面から、ペンや鋏で攻撃している。まだ労働者たちは遠

くで傍観している。

急進主義者 「我々は大胆に、団結した力で我々の必殺の槍をあいつの喉元に突き立てよう。それであいつは必ずすぐにくたばってしまうのだ。」

修正主義者 「あわてるな、落ち着け！ 我々はまずあいつの尻尾をそっと切り取ってやろう。そして少しづつあいつの腹わたを全部引き抜いてやろう。あいつがそれに少しも気づかない様に。」

第二コマ 「資本主義」は突然

暴れだし、急進主義者のペンが破け、修正主義者は後退る。

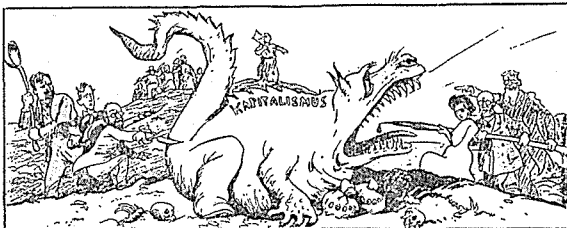
急進主義者 「えい、忌めしい。この化物はじっとしてないぞ！」

修正主義者 「う、やや！ やっぱりやつは気づいたか！」

第三コマ ようやく労働者の一群が現場に駆けつけ、ハンマーや斧で「資本主義」を殺してしまう。理論家連中は遠くで書物を手に祝福する。

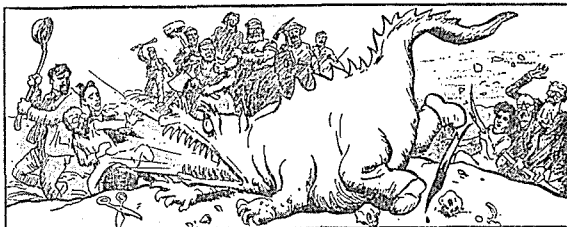
労働者 「畜生ってのは、こんな具合に一度にまったく全方向からやっつけなくちゃだめさ。これこそ正しいやり

33 Theorie und Praxis. 20



Die Metallkisten: Gedulde, schaltet erst fänden wir ihm kräftig den Schwanz ab, dann holen wir ihm allmählich alle Eingeweide heraus, — ohne daß er etwas davon merkt!

Die Metallkisten: Stoßen wir ihm mutig und mit vereinter Kraft unsere stählige Lanze in den Rücken — dann ist er mit Naturkraft vernichtet! Jetzt gilt!



Die Metallkisten: Ich bereite! Er darf doch gemerkt!

Die Metallkisten: Er versucht, das linker hält nicht nur!



Die Arbeiter: So ein Vieh muß man eben von allen Seiten zugleich packen! Das ist die allein richtige Methode.

34 「理論と実践」(W. J. 1910, Nr. 630)

方なんだ。」(W. J. 1910, Nr. 630)

かつて第一次大戦前のSPDを墮落させたのは、「修正主義」であるという説があった。それが「神話」である所以は、SPDを発展させたものが「マルクス主義」である、というもう一つの「神話」を対置すれば理解できよう。結論から言えば、理論はSPDを規定していなかった。第二帝制期SPDを規定したのは宣伝であった。宣伝と機関紙は二にして一であり、機関紙は宣伝の必要に応じて初め急進化し、後に体制内化を推進した。とすれば理論はその時々路線上において、宣伝に利用されたにすぎない。また、その宣伝の受容者たる大衆も理論によっては容易に動かず、むしろその心性を支配するイメージによって行動する。第一次大戦勃発時の「裏切り」が一握りの党官僚や組合幹部のみならず、第二インターの範たる労働者大衆の熱狂であったことを想えば、殆ど爛熟の極にまで達したSPDの矛盾が、よもや「修正主義」対「マルクス主義」というカテゴリー図式で説明されうる課題であるとは思えまい。

先の漫画を引用したH・J・シュタインベルクは第二帝制期SPDの主潮流を「実践主義」Praktizismus、つまり「党活動に対して拘束力を持つ全ての理論の徹底的な拒否」^②の姿勢と見做した。シュタインベルクの「実践主義」概念の有効性に筆者は強く共鳴するが、シュタインベルクは「神話」の解体に急なあまり「実践主義」の実像を明確に提示したとは言えない。本稿は「実践」の中核を「宣伝」と見做し、冒頭に掲げたSPDの最大発行部数誌『真相』の検討を通して、組織と宣伝の実態を解明しようとするものである。発行部数の頂点を極めた一九一二年には約三十八万の予約購読者を擁し、一五〇万を越える読者を集めた『真相』こそ、「宣伝政党」SPDの大衆プロパガンダの代表的傑作であった。この機関紙の分析の中で、宣伝の主体であるSPD組織の投影図が浮び上がってくるはずである。

それにしても、従来のSPD研究が、機関紙の役割を過少評価してきた訳では決してない。「労働運動の歴史は同時にその新聞学 Publizistik である」と言わないまでも、機関紙活動の重要性は充分指摘されてきたと言えよう。^③しかし、『前進』Vorwärts や『新時代』Neue Zeit などが資料として持つ重要性の割には、機関紙自体の分析は食しく、しかも、そ

の研究の多くは、機関紙を指導者と党員大衆のコミュニケーションの中に位置づけ、体系的に新聞学の成果を利用しているとは言えない。以下、本稿では第一章で編集者(送り手)と読者大衆(受け手)を、第二章で『真相』(媒体)とその漫画(内容)を分析し、最後に宣伝を通じてSPDの果たした役割(効果)とは何であったか、をヴィルヘルム帝制期を中心に解明してみたい。

- ① "Der Wahre Jacob" と題する W. Blos が "Frankfurter Latern"誌から引用して名付けたものの、中世のサンチアゴ・デ・コンボスナラの故事に由来する。H. J. Steinberg, Satirische Zeitschriften der deutschen Sozialdemokratischen Arbeiterbewegung, in: H. P. Harstick (Hrsg.), Arbeiterbewegung und Geschichte, Trier, 1983, S. 74 f.; F. Knull, "Der Wahre Jacob"; ein proletarischer Supermann? über die Bildsprache der revolutionären deutschen Sozialdemokratie, in: *Akzent*, (1970), S. 355. 本稿は『真相』と訳した理由は、この雑誌中の次の如き自己規定等を考慮した。Wahrheit = Humor = Wahre Jacob (W. J. 1900. Nr. 375, S. 3387)。既に水田洋『知の商人・近代ヨーロッパ思想史の周辺』(筑摩書房、一九八五)一四七頁にも『真相』の表記で言及。
- ② H. J. Steinberg, Sozialismus und deutsche Sozialdemokratie; Zur Ideologie der Partei vor dem 1. Weltkrieg, Hannover, 1967, S. 124.

第一章 宣伝政党論

エンゲルスの遺言執行人ベルンシュタインが党の正統ドグマ「マルクス主義」をその宣伝から退けるよう要求した修正主義論争の開始は、一八九七年海軍大臣に就任したティルピッツの「情報局」Nachrichten Büro 設置^①つまり体制側からの大衆動員たる「艦隊政策」の開始と時を同じくした。大衆社会への地殻変動はこうして宣伝をめぐる攻防戦の中で明

時永淑・堀川哲訳『社会主義とドイツ社会民主党・第一次大戦前のドイツ社会民主党のイデオロギー』(御茶の水書房・一九八三)二四四頁。

- ③ H. J. Steinberg, Sozialismus, S. 129. 邦訳前掲書二五〇頁。
- ④ J. Loreck, Wie man früher Sozialdemokrat wurde. Das Kommunikationsverhalten in der deutschen Arbeiterbewegung und die Konzeption der sozialistischen Parteipublizistik durch August Bebel, Bonn, 1978, S. 255.
- ⑤ 我国の研究では、西尾孝明「ドイツ社会民主党の機関紙活動 Ⅰ・Ⅱ『政経論叢』三四一六、三五一二(一九六六)と山本左門「第一次大戦前のドイツ社会民主党の教育活動の実態、マンハイム党大会以降(一九〇六年)を中心に」『法学研究』(北海学園大学法学部)一八一三(一九八三)がある。

らになった。一九〇三年ドレスデン党大会で決着したこの修正主義論争を総括すべく、SPDの「大司祭」^② K・カウツキーは自ら編集する『新時代』誌巻頭に次の如く宣言した。「我々は第一に、今なお宣伝政党 Propagandistische Parteiであることを決して忘れてはならない。我々の実践上の最重要課題は今日まだ権力の問題であるよりも国民大衆の征服 Eroberung der Volksmassen である。我々がこの征服を成し遂げて初めて権力の征服が問題となってくるのだ。」^③

つまり、この論争が惹起するはずの分裂を回避すべくカウツキーが提示したスローガンは「宣伝政党」であった。「統合イデオロギー」としての「カウツキー主義」は、E・マティアスの論じるところだが、ここではイデオロギーの問題を一先ず切り離してカウツキーの統合スローガンが「宣伝政党」であったことを確認すれば足りる。その上で、第一次大戦中の「城内平和」という名の宣伝放棄がSPDにもたらした分裂を想えばよい。第二帝制期のSPDは、斯くして「宣伝政党」であった。^⑤

一般に、社会民主主義運動の組織形成に機関紙が果たした役割の重要性は、SPD機関紙研究の共通認識と言えよう。^⑥その意味では、後のSPDを構成するラッサール派とアイゼナッハ派は何よりもまず、その機関紙政策とメディア観において、鮮明に識別できる。両派の相違は「ラッサール主義」対「マルクス主義」の教科書的図式でなく、宣伝をめぐる「集会重視」対「新聞重視」の対照において促えねばならない。^⑦ 詳論は別に稿を改めねばならないが、ラッサールの新聞憎悪とベーベル、リープクネヒトの新聞崇拜が両派の宣伝活動を規定したことは間違いないだろう。^⑧ 一八七五年ゴータ合同までに機関紙一四紙を持つアイゼナッハ派と、党員数でこれを圧倒しながら三紙しか持たなかったラッサール派を比較すれば、両者のメディア観の相違は明白である。こうした異ったメディア観に立つ両派合同の意義は、間接的非人間的メディアと対面接触メディアの弁証法的統一にあり、ここに「マス・メディア↑オピニオン・リーダー↓マス」の情報回路、いわゆる「コミュニケーション二段階の流れ」^⑨を創出したSPDは、大衆組織化に向けての足場を確立したと言える。この回路の中核、オピニオン・リーダーとは、組織活動家・演説家を兼ねた機関紙編集者であった。

革命論が国家論のコインの裏側であるように、編集部エリート論は読者大衆論と表裏をなす。まず『真相』編集部を中心に「宣伝政党」のエリート、編集者について論じておこう。

(一) 編集部エリート論

『真相』誌上では、編集者はしばしば体制側の弾圧を被るSPDの象徴として登場するが、ペーベル、リープクネヒトからエーベルト、ルクセンブルクに至るまでSPDの著名な指導者が共通項として持つ経歴は、機関紙編集者の地位である。ところが、党内における編集者の地位について、これまでの研究は必ずしも一致した見解を示してはいない。

M・ウェーバーは『職業としての政治』において、ドイツではジャーナリストの経歴が政治エリートへの上昇を意味しないと述べた上で、SPDの特殊性を指摘する。「しかし、同党内での編集者の地位は、平編集員のポストという性格が強く、指導者への足掛りとはならなかった」と論じた。一方で、L・カントロヴィチは、SPDの編集者がまず第一に政治的指導者であることを統計的に論証した。^⑭また、G・A・リッターは編集者の地位を党内ヒエラルヒーにおける上位への「踏み切り板」^⑮と見做し、R・エンゲルジンは指導者というより昇進を目指す「従士」^⑯であると考えた。しかし、編集部が党の指導部であるか、「次の世代の高等学校」^⑰であるかを静態的に論してもSPD運動のダイナミズムの解明にはならない。むしろ「宣伝政党」発展史の中に、その機能と構造の変化を位置づけることが重要であろう。本稿では、一八六七年北ドイツ連邦議会選挙から、一九一八年第二帝制崩壊まで五〇年間のSPD帝国議会議員二五人中、「議席を持つジャーナリスト」一一四名(五三・〇パーセント)について詳細な調査を行ったW・シュペーリヒの研究に拠って、五つに時期区別する。各時期を『真相』編集長の年表と対照すれば(表Ⅰ)のようになる。

一八七八年社会主義者鎮圧法成立以前のSPD系議員中、「新聞系エリート」の比率は七六・二パーセントであり、揺籃期のSPDエリートも党機関紙に強く結びついていることは明白だが、ラッサール派の『社会民主主義者』Der Social-

〔表Ⅰ〕 SPD新聞系エリートの比率と『真相』編集部

	時期区分	A ① 初当選 議員数	B ② 新聞系エ リート数	B/A (%)	『真相』編集長③
プロト「宣伝政党」期 (幹部政党期)	1867～ 1877	21	16	76.2	
ブロース・ディーツ期	1878～ 1890	41	32	78.0	1878. 11 創刊(ハンブルク)。 W. Blos, I. H. W. Dietz 1881. 3 発禁。 1884. 1 再刊(シュトゥットガルト)。 R. Seifert 1885～1890 I. H. W. Dietz 1890～1900 G. Baßler 1900～1901 F. Fischer
バ ス ラ ー 期	1891～ 1900	44	28	63.6	1901～1919 B. Heymann
ハ イ マ ン 前 期	1901～ 1911	48	24	50.0	
ポスト「宣伝政党」期 (大衆組織政党期)	1912～ 1918	61	39	63.9	1919～1923 G. Durst→ A. Rettelbusch→ P. Enderling…休刊。 1924. 1 再刊(ベルリン)名称変更。 F. Wendel 1927. 7 再び『真相』と改称。 1933. 2 発禁。

註) ① 1875年ゴータ合同以前の帝国議会初当選議員にはラッサール派(ADAV)とアイゼナッハ派(SDAP)両派を含む。A欄については, Matthias, E / Pikart, E. (Hrsg.) *Die Reichstagsfraktion des deutschen Sozialdemokratie 1898 bis 1918*, Bd. 1 Düsseldorf, 1966 を併せて参照した。

② 「新聞系エリート」とは初当選前に編集者, 記者, 新聞経営を経験した者を意味する。

③ 『真相』編集長リストは, Supper, O., *Witz, Satire und Humor in der Publizistik Württembergs: mit besonderer Berücksichtigung der schwabischen periodischen Witzblätter*, Würzburg, 1938, S. 44. を参考にしたが, 同書は誤りが多い。なお, 1884年以前の『真相』の活動内容については創刊時期を含めて対立する見解がある。Vörkering, K., *Die politisch-satirischen Zeitschriften "Süddeutscher Postillon" (München) und "Der Wahre Jacob" (Stuttgart): Ihr Beitrag zur Herausbildung der frühen sozialistischen Literatur in Deutschland und zur marxistischen Literaturtheorie*, Potsdam, 1969, S. 40.

Demokrat(一八六四年創刊)やアイゼナッハ派の『人民国家』Der Volksstaat(一八六九年創刊)の如く、党首または最高幹部による中央機関紙の独裁的編集がこの時期の特徴と言える。政党社会学上の用語で言えば、「幹部政党」Cadre Party④に相当するこの時期のSPDでは、機関紙と組織は主に指導者の演説の拡声器として機能することで結合していた。後に『真相』を創刊するW・ブロース(アイゼナッハ派)とI・H・W・ディーツ(ラッサール派)もこの時期に入党しているが、ブロースが大学で言語

学を修めたインテリであり、ディーツが植字工の遍歴修業中に運動に加ったという事実は「宣伝政党」を形成するSPD編集者の二類型をよく示している。つまり、ドロップアウトしたインテリと職人的労働者の合作により大衆的機関紙は登場したと言えよう。

非合法時代に相当するブロース・ディーツ期のSPD議員のほとんどが、生計を新聞活動に依存していたと見做しうることは「宣伝政党」形成の上で重要であるが、鎮圧法がSPD機関紙を弾圧したことの直接的影響は、指導者＝中央機関紙編集長の専制体制の崩壊であった。また、党組織を禁じ議員団のみ合法とした例外法の適用は、議員団の執行部に対する発言権を強化した。^② このため執行部は亡命した中央機関紙に「拡声器」以上の新しい機能を付与して統制力維持を図った。この執行部の意を受けてチューリヒで編集された亡命中央機関紙『社会民主主義者』Der Sozialdemokratは禁止された党大会に替って議員団への統制権を主張した。^③ 他方、穏健的な議員団多数派は組織活動の維持を目的として、中立紙・娯楽紙を装った地方新聞を各地で創刊した。^④ その一つがハンブルクの『真相』であり、それを創刊したブロースとディーツは急進化する中央機関紙と対立した議員団多数派に属していた。^⑤ この対立における『社会民主主義者』編集長ベルンシュタインによるマルクス主義理論普及活動と、多数派による地方紙創刊活動は、後年、修正主義論争、大衆ストライキ論争を惹起する理論と実践の二元論を体現していた。^⑥ そして実践の側からすれば「運動が意味を持つ所では、運動はまた機関紙を要求する」と言ったブロースの活動は注目に価する。

当時労働者層で圧倒的な人気を博した歴史物語『フランス革命史』等の作者でもあるブロースは、自由主義系新聞の編集者を経て入党したが、一八九〇年代までに彼がその創刊、編集、論説執筆を担当した党機関紙は少なくとも一六紙を数える。^⑦ 彼こそ、ディーツとともに党機関紙を商品流通機構の中に確立した最大の功労者であった。

しかし、まだこの時期は党エリートが編集を行う時代であって、編集部から党エリートが生まれる体制は、組織と機関紙が合法化される時代を待つて確立したと言えよう。

一八九〇年ビスマルク退陣とともに合法化されたSPDは、鎮圧法下の地方新聞を土台に組織拡大を推めた。バスラー期の初当選議員四人中二十八名（六一・六パーセント）が「新聞系エリート」であり、現職議員七八人中六〇名（七六・九パーセント）が生計を機関紙に依存していた。未だ有給専従職員を大量に抱え込む党・組合の官僚組織は確立せず、一九〇六年の議員歳入法成立以前のSPD議員が生活の糧を機関紙活動に求めた事態は不可避であった。この状況下で「編集者」煽動者「組織者」体制が醸成されたと言えよう。

九〇年代の『真相』編集長G・バスラー（一八六七—一九〇〇）はこうした活動家の典型と言えよう。植字工としてSPD運動に参加したバスラーは、一八七〇年代後半には『南独国民新聞』Süddeutsche Volkszeitungの編集部に入った。鎮圧法下では合唱サークルを活動の隠れ蓐としたが『シュヴァーベン週報』Schwäbische Wochenblatt編集長として数度の投獄を経験した。一八八三年ヴェルテンベルク地区代表としてコペンハーゲン秘密党大会に出席したバスラーは、地方紙の理論水準の低さを「低級紙」と揶揄する批判に対して「俺はそんな低級紙で食っているんだ。つまり俺はソーサー^{ヤーパー・ブル}屋の親爺^{ストラー}って訳だが……。」と洒落混りの反駁を行った。この開き直りには植字工から編集部を経て上昇した職人出身の党エリートの自負が感じられる。

一八九〇年一〇二号からディーツに替って『真相』の編集長となったバスラーは、シュトゥットガルト地区の党と消費組合の議長を兼ね、九四年には農業委員会Agrarkommissionに選出され、翌九五年、同地区から邦議会に選出された。一九〇〇年四月に四三才の若さで死ななければ、次のステップを登ったであろう。だが、バスラーの如く、編集者が印刷と経営を行い、組合、党組織、議員団で活動する体制は、個人の能力の限界に挑むものであった。⑤だから、成立した「宣傳政党」は組織の拡大に応じて宣伝の分業化「組織化」を志向した。既に一九一一年エルフルト党大会で議会報告を議員「編集者」に替って一括作成・配給する「文書局」Literarisches Bureau設置が提案された。⑥次いで九三年ケルン党大会では中央機関紙『前進』編集部から新たな議員立候補者を認めないことが決議された。⑦また九一年には『前進』の編集・経営を

監査するベルリン地区新聞委員会 Presskommission が導入され、以後殆ど全ての地方紙に設置された。分業化の進む編集部の風景を『真相』はこう風刺している。

大新聞編集長 「こんちきしょう！ ホールの外のひどい騒ぎは何事だ！」

植字工 「何んでもありませんよ。ただ政治記者と経済記者の喧嘩です。政治では『新時代の曙光』って論説を、経済では『大恐慌の前夜』って記事を、同じ号に載せろって言うんです」(W.J. 1909, Nr. 566)

このように一九〇五年以降顕在化する党の組織化に先立った宣伝の組織化の中で、ベルンシュタインの提起した「修正」は、党員大衆の献身を促すよりも機関紙の理論水準向上に不可欠なインテリを運動に獲得することに有効であったはずで、「低級紙」を活動基盤とした党活動家たちが修正主義に冷淡であったのは当然と言えよう。これを黙殺して党機構の官僚制化を推進した改良主義者は、この九〇年代に入党し編集部で頭角を現わした第二世代のエリートである。彼らこそ、宣伝が生み、機関紙が育てたエリートであった。

一九〇〇年、党機関紙に結党以来君臨してきた『前進』編集長W・リープクネヒトの死去は、一九〇七年の第一書記I・アウアーの死去が党組織の世代交替を象徴するのと同様に、党編集部の変質にとって象徴的であった。ハイマン期の初当選議員における「新聞系エリート」の比率五〇・〇パーセントは、先行する時期の六三・六パーセントからの後退、つまり編集者＝議員体制の動揺を示している。九〇年代の編集部の組織化は編集者数の急速な膨張をもたらし、以前同様、編集長に議員ポストを約束することは不可能になった。それにともない、不安定な「政治家」の地位でなく、職業ジャーナリストを目指す一派が編集部に出現した。^④こうした変化が、一九〇〇年「労働者新聞協会」Verein der Arbeiterpresseの設立に顕在化した。SPD編集者の職能組合的性格を持つこの組織は、経営・人事権を握った新聞委員会と対立し、一九〇三年ドレスデン党大会での「ブルジョア紙寄稿問題」や一九〇四年以来の『前進』編集部紛争の中で職能的利害を強化した。一方、一九〇五年「改良主義者」エーベルトを書記委員とした党執行部は、一九〇六年、専門的編集者養成を目指

す党学校 Parteschule^⑭を設置して、この傾向に応じた。

一九〇一年『真相』編集長に就任して以来、一九一九年までこのポストにあったB・ハイマンは、第二世代エリートの典型と言える。一八七〇年ポーゼン州のユダヤ人商人の家に生まれたハイマンは、九〇年代の「宣伝政党」に入党し、九七年にはブラウンシュヴァイク『人民の友』Volksfreundの編集長となった。翌年にはハノーバー一二区の帝国議会議員候補に、一九〇三年からは、シュトラットガルト市議会、ヴェルテンベルク邦議会の議員になり、同邦の憲法改正問題や予算問題などを修正主義・改良主義の拠点たる『社会主義月報』Sozialistische Monatshefte誌上で論じた^⑮。そして一九一二年には『学費と国家負担』と題する著作を物し、SPD文教政策の「専門家」となるハイマンは、西南ドイツ改良主義者の典型と言えよう。この時期、社会政策のC・ゼフェリング（一八七五年生）、農業政策のO・ブラウン（一八七二年生）、軍事植民政策のG・ノスケ（一八六八年生）など後年ワイマール共和国で要職に就く改良主義者は、編集長を経て「専門家」議員の活動を始めている。つまり、SPD編集部に職業ジャーナリストの意識が浸透すると並行して、宣伝のための議会戦術から交渉のための議会活動に重点を移した職業政治家が台頭してきた。

編集者＝議員体制の以上の如き変質は一九〇七年「新聞局」Pressebureauの設置によって決定的になった。同年のいわゆる「ホットントット選挙」の敗北は、党内で大衆宣伝の失敗と見做され、これを直接的契機とし、ブルジョア新聞コンツェルンの運営を範として採用されたのが、この新聞局に他ならない^⑯。これによる記事・論説・娯楽欄の作成と配給の中央集権化は編集長が議員活動に専念することを容易にしたが、各々の編集部が党の宣伝活動に占める地位の低下をもたらした。編集部在地盤沈下は「宣伝政党」変質の序章であった。

一九一二年の帝国議会選挙はSPDを第一党にする大躍進を招来した。この選挙の立候補者の内、ジャーナリストの肩書きを持つ者は、SPD候補者で約一四パーセント、それ以外では約二パーセントであった^⑰。そして、ポスト「宣伝政党」期の初当選議員六一人中「新聞系エリート」三九名（六三・九パーセント）という数字は「宣伝政党」の継続を想わせる。

しかし、一九一四年のSPD議員団一一〇人中、労働者新聞協会所属者は二〇名（一八・二パーセント）に過ぎない。つまり、協会所属の編集者二四一人中帝国議會議員は八・三パーセントであり、ワイマール期一九二七年の三・七パーセント（三七四人中一四名）に至る編集者と議員の分離傾向は明白となった。^⑧この専業編集者の代表は、ワイマール期『真相』の編集長F・ヴェンデルだろう。彼はもはや政治家でなく、漫画編集の「専門家」として『漫画』における社会主義『漫画』における一九世紀』など六冊の漫画研究書を公刊している。『真相』の時代、つまり「宣伝政党」期の栄光を伝える「史官」と言うべきであろうか。

ともかく一九一二年以降は執行部―新聞局のヘゲモニーの下で「宣伝政党」が推進した組織化の最終段階であり、第一次大戦を契機とした「大衆組織政党」への脱皮が用意された。

以上、編集部と議員団の関係を軸に「幹部政党」から「大衆組織政党」に至る過程の中間政党として「宣伝政党」の発展を跡づけてきた。この発展をSPD編集者の社会的性格から見れば次の如く言えよう。

編集部における大学入学資格保有者 *Abiturient* の占める割合は、「宣伝政党」期の前後を通じて以下のように推移した。ブルジョア自由主義の影響下に成立した第一世代編集部（ブロス・ディーツ期）の一八七七年には四四人中一二名（二七・〇パーセント）、機関紙が育てた党エリートの第二世代編集部（バスラー・ハイマン期）の最終局面一九一四年では二四一人中二八名（一一・六パーセント）、組織化と専門家が極まった第三世代編集部の一九二九年では三三三人中五四名（一六・八パーセント）となる。ちなみに、ワイマール期の編集部への小ブルジョア層の流入は、一九一四年に八〇・二パーセントであった労働者階級出身者の比率が一九二九年には六六・一パーセントに減少していることから裏付けられる。とすれば、「知識人」の比率が最も低い「宣伝政党」の編集部は、党内上昇の登龍門として機能することで労働者と党エリートの連続性を生み出したと言える。その連続性の象徴が『真相』というマス・メディアに他ならないが、その成功は、編集者・寄稿者が名もなき大衆の一人であったから可能となったのではない。むしろ職人出身であれインテリで

あれ編集者となった彼らが、存在としては大衆から離れていたこと、あるいは離れていったこと、しかも伝統的エリートへの上昇可能性を閉ざされていたこと、を自覚して始めて可能となった。つまりSPD編集者は大衆ではありえず、しかし体制からは大衆と見做されることで、大衆を強烈に意識する大衆知識人となった。彼らは観念上の大衆を政治組織に実現したが、そのメディア『真相』はこの「似非知識人」にふさわしい。それが「似非」なる所以は、彼らの多くが既存の文化の辺境を歩み続けて「宣伝」という文化に到達したからである。それを辺境と呼ぶのは、そこで科学と土俗が混合され、知識人と大衆が同舟し、階級意識と国民意識が渾然一体となり、政治と芸術が互いに侵食し合ったからである。社会主義文学として、まして社会主義理論としては凡そ「三流」以下であった『真相』とその編集者に与えられた煌々たる後光は、いわば社会主義と大衆社会が遭遇した際の創造の火花であった。ともあれ、『真相』の検討の前に、さらにその読者を素描しておかねばなるまい。

(二) 読者大衆論

識字率を左右する教育政策から労働者文化に至るまでの考察、あるいはSPD機関紙読者層の統計学的分析も含めて、『読者論』は別の機会に詳論することにして、ここでは『真相』読者に考察を限定しておく。

一八七〇年代に始まる都市労働者層への新聞メディアの浸透は初等教育の拡充と連動したが、それが労働者層の文化的疎外感を解消することはなかった。こうした教育行政を『真相』は「重大問題」への一將軍の答弁として次の如く風刺している。

「なお軍隊の中にいる多くの文盲について、なぜ苦言を要しようか。連中が読めない限り社会民主主義の文書も何ら害を及ぼすことは出来ないだろう。」(W. J. 1906, Nr. 520)

これに対するSPDの運動が如何なる意味を持ったか、という問いには、ブロース・ディーツとともに『真相』を編集

した詩人、M・ケーゲル（一八五〇—一九〇二）の作になる労働者の愛唱歌「社会主義者行進曲」 Sozialistenmarsch の一節を挙げておこう。

「大地の恵み 太陽の光輝

理知の栄光 知識の威力

其は全ての民の天賦なり

我等を求めし標なり

聖なる戦の成果なり。」（傍点筆者）

これを愛唱した第一世代の党員たちの烈しい教育渴望と読書意欲は、当時の回想の多くが証明している。しかし、そうした情熱の存在は必ずしも機関紙の内容の理解を意味しない。一八七一年、入党の際の状況を『真相』の編集長ブロースはこう回想している。「私は当時リープクネヒトによって編集されていた『人民国家』をすぐ予約した。私はその中に、直ちに理解することができない、私とは掛け離れた世界を覗いた。」^⑩ブロースの表現が幾分誇張されているとしても、独特な用語法と外来語を駆使する中央機関紙の内容が、一般党員に難解であったことは疑い得ない。だが「未熟な読者の熱烈な〈聖書信仰〉 Schriftgläubigkeit」^⑪にとって活字の内容は二の次であった。つまり鎮圧法下の弾圧が機関紙の発禁・押収として体験されたことは、機関紙に「殉教」のイメージを与え、読者は内容の理解とは別に「資本主義の終末論」や「社会主義の至福千年」を読み取ることが出来たのであろう。^⑫

鎮圧法下の一二年間で機関紙の購読者数は約一七万人から約二五万人への増加にとどまったが、合法化された九〇年代はメディアの技術革新、労働者の実質賃金上昇などの影響も相俟って、SPD紙の購読者層は急速に膨張して行った（表Ⅱ・C欄を参照）。しかし、選挙でのSPD得票数と比較すれば、SPD支持者の過半数がなお商業新聞の読者であること、つまり機関紙購読者層は党員とその予備軍に限定できること、^⑬は明らかである。第二帝制期SPDの平均的な党員とは、労

〔表Ⅱ〕

	A 欄		B 欄			C 欄
	党員数	増加率(%)	普及度 『前進』	『新時代』	『真相』	
1890						254,100
1891						
1899						400,000
∴						
1904						600,000
1905						
1906	384,000	—	3.4	53.4	1.9	837,790
1907	530,000	38.0	3.9	66.3	2.3	
1908	587,000	10.7	4.1	69.1	2.5	
1909	633,000	7.8	4.6	70.4	2.5	1041,488
1910	720,000	13.6	5.9	73.5	2.5	1160,016
1911	837,000	16.1	5.3	79.7	2.7	1306,465
1912	970,000	15.9	5.9	94.2	2.5	1478,042
1913	983,000	1.3	6.3	93.6	2.6	1465,212
1914	1086,000	10.5	6.7	102.5	3.0	1488,345

註) 数値は、Fricke, D., Handbuch, S. 421, 403, 429.

普及度＝予約購読者÷党員数

の購読者数に比べて、『真相』だけが党員二・五人に一誌という異常な普及度を維持した。

それでは『真相』は自らの読者、つまり党員大衆を如何に描いたであろうか。イラスト②の如く、党を支持する労働者の姿は皮の腰まきをまとい、ハンマー等を握る手工業職人として描かれ、一方、抑圧、搾取される国民の姿は、愚直・鈍重・忍耐を含意する「民衆」Michelの表記をともない、イラスト③の如く農民的イメージが与えられた。この明白なシンボル操作は、都市政党SPDが急速に進展する都市化の中で「民衆」を運動主体たる「都市大衆」として獲得した経緯

働組合に組織された都市在住の手工業的熟練工を意味するが、彼らの政治的社會化に『真相』が果たした役割は、M・ブローメの回想④などからも推測できる。また、F・レーバインは、八〇年代以降の「農村労働者の科学的社會主義への道程」を次のように回想している。「農村においても、今や以前よりも多く社會民主主義について語られ、その會話に私もしばしば参加した。その上、私の傍にいた年配のカニ漁師は『真相』を持っていた。当時それは大衆向けの風刺雑誌として我々を大変楽しませた。」⑤書籍行商人によつて、SPD地方紙が浸透できなかった農村まで流布された『真相』の読者層こそ、SPDプロバガンダが対象とした民衆の最大公約数であったと言える。それは『真相』の党内普及度（B欄参照）からも裏付けられる。党員数の増大に追いつかない中央機関紙『前進』や理論誌『新時代』



②「労働者」シンボル
(W. J., 1905, Nr. 507)

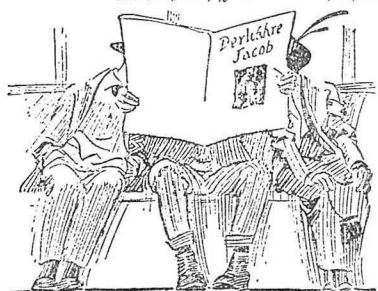


③「民衆」シンボル
(W. J., 1904, Nr. 480)



④1893年『『真相』ここにあり』
(W. J., 1893, Nr. 193)

❖ Wie der Wahre Jacob neue Freunde gewinnt. ❖
Eine Straßenbahnscene. (Nach Life.)



„Was haben Sie denn nur so viel zu lachen, Herr Nachbar?“
„Sehen Sie denn nicht, daß ich die neueste Nummer des Wahren Jacob lese?“
„Ja, das erklärt alles! Ich bedaure unendlich, ihn nicht längst abonniert zu haben, will es aber sofort nachholen, damit ich ebenso vergnügt sein kann wie Sie!“

Jede Postanstalt, jede Buchhandlung, jeder Zeitungsdepoteur und Kolporteur nimmt Bestellungen entgegen. Preis der Einzelnummer 10 Pf. Probenummern werden kostenlos auf Verlangen der Verlag des Wahren Jacob, Stuttgart, Haribachstraße 12.

⑤1914年「如何にして『真相』は新しい読者を獲得するか」(W. J., 1914, Nr. 719)

を説明する。それは『真相』の自己規定の中でさらに明白となる。一八九三年一九三号の『真相』ここにあり」と題するイラスト^④は、小さなアトリエで『真相』の回りに集まって朗読される文句に耳を傾け挿絵を覗き込む職人一家の姿を描いた。こうした小さな「集会」から巨大な組織は生み出された。そして一九一四年の『真相』購読者勧誘広告（イラスト^⑤）は、その帰結となろう。そこでの読者は電車の座席で『真相』を広げるサラリーマンとそれを覗き見る隣席者である。その姿は現代の都市大衆に限りなく近い。

こうした読者の関心、つまり、多様な内容を掲載した機関紙の中でどの要素が読者に優先的に受け入れられたかは、労働組合図書館などの貸し出し状況を検討すれば推定できる。この種の資料が示す事實は、九〇年代以降生じた社会主義理論への関心低下と娯楽小説類の需要増大である。機関紙読者の増大と並行する理論離れ現象は、機関紙の大衆化が単に数の問題でなく構造の問題として考察されねばならないことを示唆している。

- ① A. Hall, The War of Words: Anti-socialist offensives and counter-propaganda in Wilhelmine Germany 1890-1914, in: *Journal of Contemporary History*, July (1976), p. 18.
- ② 党書記・フウナーが一八九九年四月一〇日付R・シエマット宛書簡で使った表現。W. Sperlich, *Journalist mit Mandat: Sozialdemokratische Reichstagsabgeordnete und ihre Arbeit in der Parteipresse 1865 bis 1918*, Düsseldorf, 1983, S. 183.
- ③ K. Kaustky, Nachklänge zum Parteitag, in: *Die Neue Zeit*, 22 Jg. (1903) Bd. 1, S. 1.
- ④ E. Matthias, Kaustsky und Kaustkyanismus; Die Funktion der Ideologie in der deutschen Sozialdemokratie vor dem ersten Weltkrieg, in: I. Fetscher (Hrsg.) *Marrismustudien*, 2 Folge, Tübingen, 1967, S. 151-197. 安世舟・山田徹訳『なまよちとを阻止すべきなかったか』（岩波現代選書・一九八四）一七三頁〜二四二頁。
- ⑤ SPDが煽動活動に一面的に全力を集中したため、権力政治上の機能停止に陥ったとする指摘。G. A. Ritter, *Die Arbeiterbewegung im Wilhelminischen Reich: Die Sozialdemokratische Partei und Freie Gewerkschaften 1890-1900*, Berlin, 1959, S. 128.
- ⑥ 例外的にSPD機関紙研究の先駆的著作。L. Kantorowicz, *Die sozialdemokratische Presse Deutschland* (Diss.), Tübingen, 1922, S. 3.
- ⑦ W. Sperlich, *op. cit.*, S. 23f.
- ⑧ J. Loreck, *op. cit.*, S. 13-19.
- ⑨ W. Schröder, *Handbuch der sozialdemokratischen Parteitage von 1863 bis 1909*, München, 1910, S. 439.
- ⑩ F. Osterroth / D. Schuster (Hrsg.), *Chronik der deutschen Sozialdemokratie*, Bd. 1, Berlin-Bonn-Bad Godesberg, 1975, S. 48.
- ⑪ カッス・ラザースフエルトによるこの有名な仮説を一般命題化する。

れば以下の如くなる。マス・コミュニケーションは受け手の効果の必要かつ十分な原因として作用するのではなく、媒介的諸要因と諸影響の連鎖の中での連鎖を通じて機能する。J・T・マンマン、マハク放送学研究叢訳『マス・メディアの効果』(日本放送出版協会一九六〇)二四頁。

- ② S. M. Braig, *Die Presse um 1900 im Spiegel der Satire: Unter Zugrundelegung der Witzblätter "Kladderadatsch", "Ull" und "Wahre Jacob"* (1897-1907), (Diss.), München, 1954, S. 31 f.
- ③ M. Weber, *Gesammelte politische Schriften*, München, 1921, S. 416-419. 中村真一・脇井平他訳『政治論集』(ちくま書房、一九八二)五七六-五七九頁。ハイムとグロートの編集者の社会的地位の低さを「ヤコブ」K. Brunnhuber, *Das deutsche Zeitungswesen*, Leipzig, 1908, S. 5 f.
- ④ L. Kantorowicz, *op. cit.*, S. 97-100.
- ⑤ G. A. Ritter, *op. cit.*, S. 63.
- ⑥ R. Engelsing, *Massenpublikum und Journalismus in 19. Jahrhundert in Nordwestdeutschland*, Berlin, 1966, S. 239.
- ⑦ F. Stampfer, *Erfahrungen und Erkenntnisse*, Köln, 1957, S. 27.
- ⑧ W. Spertlich, *op. cit.*, S. 114-146.
- ⑨ K. Koszyk, *Die Presse der deutschen Sozialdemokratie*, Hannover, 1966, S. 3-7; D. Fricke, *Die deutsche Arbeiterbewegung 1869 bis 1914: Ein Handbuch über ihre Organisation und Tätigkeit im Klassenkampf*, Berlin O., 1976, S. 366-69, S. 375-78.
- ⑩ M. Duverger, *Political Parties*, trans. by B. and P. Noh, London-Methuen, 1956, pp. 63-71.
- ⑪ W. Spertlich, *op. cit.*, S. 119 f.
- ⑫ フロース入党一八七二年、チヤーツ入党一八七四年。F. Osterroth (Hrsg.), *Biographisches Lexikon des Sozialismus*, Bd. 1, Hannover, 1960, S. 26, u. 63.
- ⑬ W. Spertlich, *op. cit.*, S. 28 f.
- ⑭ Das Sozialistengesetz 1878. 21. Oktober in: "Der Wahre Jacob" 1928 Jubiläums-Festschrift, Berlin 1928, S. 5.
- ⑮ W. Spertlich, *op. cit.*, S. 28 f.
- ⑯ "Der Wahre Jacob" Jubiläums-Festschrift, S. 6 f. K. Vorkerling, *op. cit.*, S. 39.
- ⑰ H. J. Steinberg, *Sozialismus*, S. 32 f. 邦訳四六一頁。睡眠と覚醒の二状態を「ヤコブ」J・G・グロート, *Negative Integration und revolutionärer Altruismus: Die deutsche Sozialdemokratie am Vorabend des Ersten Weltkrieges*, Frankfurt a. M., 1973, S. 58 f.
- ⑱ W. Blos, *Die sozialdemokratische Presse in Deutschland*, in: *Handbuch des Vereins Arbeiterpresse*, 3 Jg. (1914), S. 21.
- ⑲ V. Lidtke, *The Alternative Culture: socialist Labor in Imperial Germany*, New York-Oxford, 1985, p. 140, p. 187.
- ⑳ W. Spertlich, *op. cit.*, S. 155 f.
- ㉑ 邦訳版記述の確かな「四〇四年」は、党官僚組織形成の「ヤコブ」C. H. Schorske, *German Social Democracy 1903-1917: The Development of the Great Schism*, Cambridge, 1955, pp. 122-127; *Handbuch für Partei- und Gewerkschafts-Angestellte*, Bd. 1 (1908), S. 27.
- ㉒ 邦訳版記述 W. J., 1900, Nr. 560, S. 3244.
- ㉓ W. Schröder, *op. cit.*, S. 10-12.
- ㉔ R・マニエの「A」は、意識の昏花と精神病の原因を「ヤコブ」田中「R. Michaels, *Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie*, Stuttgart, 1925, S. 53-55. 藤澤・樋口幾子訳「現代民

- ① 中野実『日本社会主義の発展』(『社会主義』1931年) 四四—五五頁。
 ② *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitagcs des S. P. D. 1891* (Erfurt), Berlin, 1891, S. 302. 以下 *Prot. 2* 参照。
 ③ *Prot. 1893, Köln*, S. 130 ff.
 ④ W. Schröder, *op. cit.*, S. 458-460; K. Kozczyk, *op. cit.*, S. 12.
 ⑤ P. Nettle, *The German Social Democratic Party 1890-1914*, in: *Past and Present*, 30 (1965), p. 68 f.
 ⑥ W. Spertlich, *op. cit.*, S. 138.
 ⑦ R. Schmidt, Geschichte des Vereins Arbeiterpresse und der Unterstützungsvereinigung in: *Jahrbuch für Partei- und Gewerkschafts-Angelegenheiten*, Berlin, 1908, S. 5-50.
 ⑧ *Prot. 1903, Dresden*, S. 263.
 ⑨ A. Hall, *Scandal, Sensation and Social Democracy: The SPD Press and Wilhelmine Germany 1890-1914*, Cambridge, 1977, p. 39 f.
 ⑩ N. Jacob, *The German Social Democratic Party School in Berlin 1906-1914*, in: *History Workshop*, 1978-5, p. 181.
 ⑪ *Handbuch des Vereins Arbeiterpresse*, 3 Jg. Berlin, 1914, S. 530.
 ⑫ B. Heymann, Die Verfassungsreform und Neuwahlen im Württemberg, in: *Sozialistische Monatshefte* (1906), S. 1020-1024; ders., Die Budgetbewilligung und die württembergische Sozialdemokratie, in: S. M., (1907), S. 943-947. 以下 *Handbuch des Vereins Arbeiterpresse* 参照。
 ⑬ B. Heymann, *Die Übernahme der Schulasten auf dem Staat*, Stuttgart 1912.
 ⑭ 中野実『日本社会主義の発展』(『社会主義』1931年) 四四—五五頁。
 ⑮ 帝國社会主義研究中心『「史實」八四(一九六八)』
 ⑯ W. Spertlich, *op. cit.*, S. 34.
 ⑰ A. Hall, *Scandal*, p. 32 f.
 ⑱ E. Fischer, *Grundlagen der Interpretation der Politik der deutschen Sozialdemokratischen Presse*, Heidelberg, 1928, S. 10.
 ⑲ K. Rickers, Der Wahne Jacob: Zum Tode von Friedrich Wendel in: *Vorwärts*, Nr. 12 (1960).
 ⑳ E. Fischer, *op. cit.*, S. 9 f.
 ㉑ *Ebenda*.
 ㉒ V. Lidtke, *op. cit.*, p. 118 f.
 ㉓ J. Loreck, *op. cit.*, S. 165-168.
 ㉔ W. Blos, *Denkwürdigkeiten eines Sozialdemokraten*, Bd. 1, München 1914, S. 85.
 ㉕ 帝國社会主義の発展』(『社会主義』1931年) 四四—五五頁。
 ㉖ *Handbuch des Vereins Arbeiterpresse*, 3 Jg. Berlin, 1914, S. 226.
 ㉗ R. Engelsing, *op. cit.*, S. 83.
 ㉘ A. Hall, *Scandal*, p. 16.
 ㉙ G. Roth, *op. cit.*, p. 246.
 ㉚ E. Fischer, *op. cit.*, S. 22 f.
 ㉛ W. Emmerich (Hrsg.), *Proletarische Lebensläufe*, Reinbeck, 1974, S. 293.
 ㉜ *Ibid.*, S. 281.
 ㉝ *Handbuch des Vereins Arbeiterpresse* / K. Schönhoven, Arbeiterbibliotheken und Arbeiterlektüre im Wilhelminischen Deutschland, in: *Archiv für Sozialgeschichte* (1976), S. 135-204.

第二章 『真相』論

(一) 『真相』史

かつてグーテンベルクによって活字印刷が発明されたマインツが、またその印刷物の検閲誕生の地であったように、情報活動は出版と統制の織り成すドラマである。『真相』は鎮圧法制定の翌年、一八七九年、亡命中央機関紙『社会民主主義者』とほぼ同時にハンブルクの地域月刊紙(全四頁)として創刊された。^①自ら『真相』の寄稿者であった党史家F・メーリングは、その創刊を次のように記述した。「党が社会主義者鎮圧法施行の直前に創刊した文学的娛樂新聞は、この法律で間接的に潰された。その後、J・H・W・ディーツはR・ラバントおよびW・ブロースの協力のもとに『真相』を党の文学活動のための新しい舞台とした。同紙はもともと漫画新聞で最初は揺れ動く土台の上を用心深く歩いていたが、年を経るにつれてますます内容が豊富になり、数十万の読者を持つようになって、党の中で最も広く読まれる新聞になった。」^②もっとも、地方紙『真相』が「文学的活動」をカムフラージュとしていたことは既に述べた。このカムフラージュ新聞もある意味では亡命紙以上の危険の中にあった。一八九〇年ハレ党大会を報じた『真相』一二二号は鎮圧法時代をこう回顧している。「……その(鎮圧法の)圧力の下で嚴重に禁止されているものが何で、許されるものが何かは、社会主義者もリヒター派も知らなかった。……中略……発禁のダレイモスの剣はしばしば落下して筆舌に尽し難い努力で作られたものを一撃で破壊したものだ。」^③鎮圧法の二二年間で延一〇四種のSPD機関紙が廃刊に追い込まれたが、一八八〇年一〇月『真相』も発禁となり、ディーツ、ブロース等はハンブルクを追放された。翌八一年二月三十一日、彼らはシュトゥットガルトでディーツ出版社を設立し、鎮圧法の緩和にともなって、八三年K・カウツキー編集になる月刊理論誌『新時代』を、翌年一月より全国誌として『真相』を再刊した。^④そこで重要なことは、この八〇年代に生じたSPD機関紙を取り巻く環境の変貌であろう。八〇年代の幕開けとともに無党派、非政治色、スキャンダル性を呼び物とした『日刊評論』Tägliche Rundschau(一

八八一年刊）や『ベルリン報知』Berliner Lokal Anzeiger（一八八三年）など近代的営利新聞がドイツでも漸く登場してきた。^⑤ こうした廉価な「広告新聞」は、SPD紙の独占的市場として広がっていた都市労働者層をSPD紙と激しく奪い合った。一八八七年、いわゆる「カーニバル選挙」のナシヨナリズム煽動を『真相』は「悪辣極まるナポレオン流国民投票」^⑥と評したが、九七年以降の艦隊宣伝、一九〇七年「ホットェントット選挙」を挟んで一九一四年に至る情報環境の成立にこうした大衆新聞の出現は決定的であった。つまり、SPD紙対策に鎮圧法を持って臨んだ体制側は、SPDを宣伝戦で「兵糧攻め」^⑦する可能性を大衆新聞に見出し、鎮圧法廃案の前提が形成された。

一方、一八九〇年『真相』一〇一号は一〇〇本の「風刺の矢」が鎮圧法を廃案に追い込んだと自画自賛するイラストを掲げた。^⑧ 実はここに鎮圧法と「宣伝政党」の間の逆説がある。政治的弾圧や社会的疎外がSPDのイデオロギーを急進化させたという通説の背後には、後にSPDが政治の大衆化をリードしてきた基礎がこの時期に形成されたという事実がある。鎮圧法がSPDに強いた財政上の困難は、宣伝に際して経済的要素を重視する伝統を生み、^⑩ その結果、ブルジョア紙との競合も加わって機関紙の大衆化政策が逸早く確立した。一八八八年、隔週刊に改め頁数を倍増した『真相』は、編集長デューツの大衆化宣言を掲げた。「編集部は有能な人材によって強化され、同時に新たに芸術家も獲得した。それ故、『真相』の内容と意匠はドイツの娯楽文芸の第一線に進むことになる。」^⑪

かくして鎮圧法廃案時、SPDは党機関紙六〇紙、組合紙四一紙、理論誌『新時代』、文芸誌『新世界』Neue Welt、風刺漫画雑誌『真相』『南独郵便御者』Süddeutsche Postillonを擁する「宣伝政党」に成長していた。^⑫

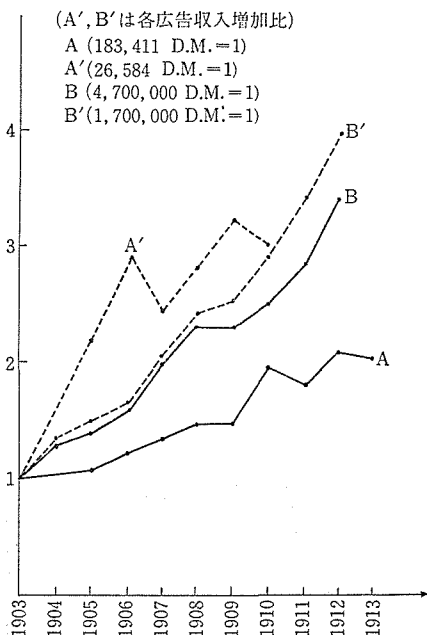
亡命中央機関紙『社会民主主義者』に替って、ベルリン地方紙『ベルリン人民新聞』Berliner Volksblattが中央機関紙『前進』に改称した一八九一年、『真相』も一三五号よりタイトル頁を三色刷にし、女性読者のための付録年鑑、『真相』絵葉書等の配布、販売を通して多角的な読者層開拓に乗り出した。^⑬ この結果である、大戦直前の『真相』予約購読者数三七万人を、主要なブルジョア漫画雑誌の予約購読者数、『ジンプリチシムス』Simplicissimus 八万人、『クラデラダーチュ』

Kladderadatsch 四万人、『娛樂雑誌』Lustiger Blätter 七万人と比べれば^⑩、『真相』の成功が比較を絶していたことが判る。その成功の原因として、大衆向けの紙面作りの新手法——韻文による論説、刺激的なアフォリズム、宣伝小説、懸賞小説募集など——と、読者との接触を求める編集方針——質疑応答欄、体験記の採用など——を挙げるならば、二〇世紀に一般化したSPD紙編集の大衆化は『真相』の開いた地平の上に推進されたと言えよう。その顕著な例が一八九四年のB・シューンランクによる『ライプチヒ人民新聞』Leipziger Volkszeitung 改革である。『真相』の主要な執筆者であった彼は、娛樂欄の拡大、漫画、風刺コラム、投書欄の導入を断行し、同紙を中央機關紙に次ぐ党内有力紙に変えた^⑪。後年、その編集部にはF・メーリング、R・ルクセンブルクが加わり党内左派の拠点となる同紙の權威が、理論水準でも革命性でもなく大衆性に基づくものであったことは強調されてよい。さらに『真相』は一八九七年、漫画欄を拡大して、『娛樂付録欄』Illustrierte Unterhaltungsbeilage とし、これ以降第一次大戰まで続く紙面構成を完成した。

一方、合法化後「教宣地区」Agitationsbezirkを単位として再編成された「宣伝政党」の組織化を機關紙発行形態に求めるならば、鎮庄法下で確立した合名会社経営から党の直接経営への移管に確認できる。一九〇二年『前進』、一九〇四年ディーツ社の党有移管に先立って、一九〇一年には『新時代』、婦人誌『平等』Gleichheitとともに『真相』が党有移管された。その際、執行部が『真相』を特に重視していたことは翌年ミンヘン党大会の会計報告に明らかとなる。『真相』は一九〇一年の会計年度で二〇〇三・四五マルクの純益をあげた。実に喜ばしく、おそらくなお増加可能な成果であろう。しかし『真相』はずっと以前から彼に親しく寄り掛っていた二人の姉妹を持っていた。『真相』は以前から彼女達の支援者であった。このことは今も変わっていない。この二人の姉妹に『真相』の純益は相当食い潰されている。『新時代』は一〇三・五マルクの赤字（謹聴ノ 謹聴ノ）『平等』は四四八〇マルクの赤字で縮めた。……中略……そのため今日以下のことが明白である。この財政面の検討において、なおしばらく補助金を考慮せねばならない^⑫。」

その後、「大きな利潤を絞り出すための乳牛」^⑬に成長してゆく機關紙の中にあって、『真相』の収入増加曲線は少なくと

〔表Ⅲ〕『真相』(A)と全SPD機関紙(B)の
収入増加比



註) A, A' は年次党大会報告から作成。

A, A' の1904年と A' の1911年以降は不明。

B, B' は D. Fricke, *op. cit.*, S. 413. より作成。

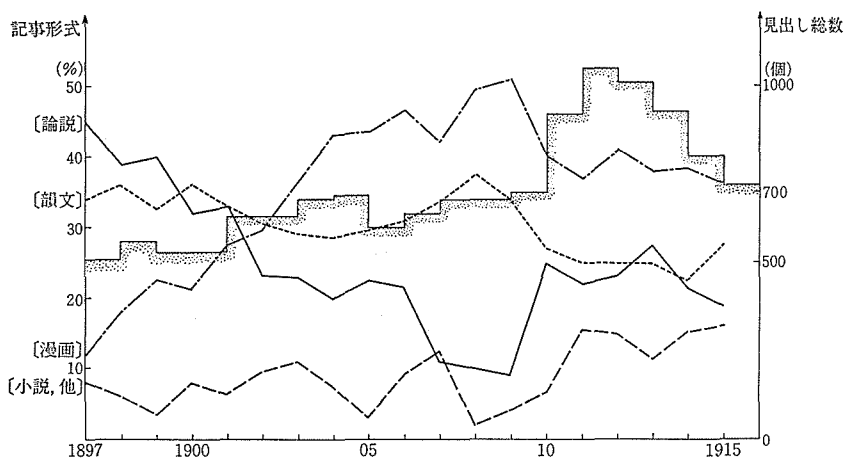
も一九一〇年まで全SPD機関紙総収入のそれに対応していた(表Ⅲ参照)。また広告収入増加率で他の機関紙をリードしたことは、一九〇二年『真相』の一般広告採用以降、他のSPD紙もこれに追隨したことから裏付けられる。

一九一〇年ミュンヘン発行の兄弟誌『南独郵便御者』を吸収し、党内唯一の風刺漫画雑誌となった『真相』は、翌一年には予約購読者を三〇万の万台に乗せたが、翌年の三八万人を最後に『真相』購読者数の不断の上昇は終息した。この数字は「宣伝政党」の組織化の金字塔であると同時に、その墓標であった。この年の帝国議会選挙でSPDの収めた大勝利は、宣伝の勝利であるよりは宣伝が生んだ組織の勝利であった。既に一〇〇万党员、二五〇万自由労働組合員、六〇〇万読者を組織したSPDの成長は「階級政党」としての限界点に達していた。

一九一三年、A・ブラウンはイエナ党大会で、SPD日刊紙九〇紙中七八紙の内容は画一化されていると批判したが、それは新聞局による統制が行き渡ったことの現れである。機関紙がこれほどまで管理されているという事実は、一方で組織

によって宣伝の消費が管理されていること
を前提とする。しかし、これが即SPDの
宣伝が体制内化したことを証明するもの
ではない。だが、体制内化した組織は宣伝の
方向を組織内部に集中し始めた。イエナ党
大会で提出された機関紙に関する議案(第
四七号から第五八号)は、機関紙の内向化を
如実に示している。議案の過半数は、婦人労働
者のためのファッション情報の提供(四
八・四九・五〇)、青年活動家のための教育学

〔表Ⅳ〕 記事形式の変動(折れ線グラフ)と見出し総数変化(棒グラフ)



雑誌の創刊(五三・五四)、労働者家庭の子供用付録の採用(五七)であった。^②
 一九一四年『真相』新年号は再刊三〇年を祝った。ツァーベルン事件を厳しく批判した新年号は、プロイセン体制と戦い続けた『真相』の記念号に相応しい。しかし、同じ紙面で、「ツァーリズムに抗して」戦う「戦場の同朋に」向けての愛国主義が鼓舞されるのはわずか八ヶ月の後である。^③それを転向と断罪するのは容易だろうが、むしろ一九〇八年ニエルンベルク党大会における一代議員の苦悩を引用しておこう。「我々は反軍国主義アジェンションを行うが、あなた方がこの蓄音器を買えば、祈りと万歳でセダンの戦いを体験するだろう。広告のこうした状況がまさに『真相』の中にもあるのだ。」^④
 次に、『真相』の内容分析を通して『真相』に反映した党の変質を考察してみよう。

(二) 内容量分析

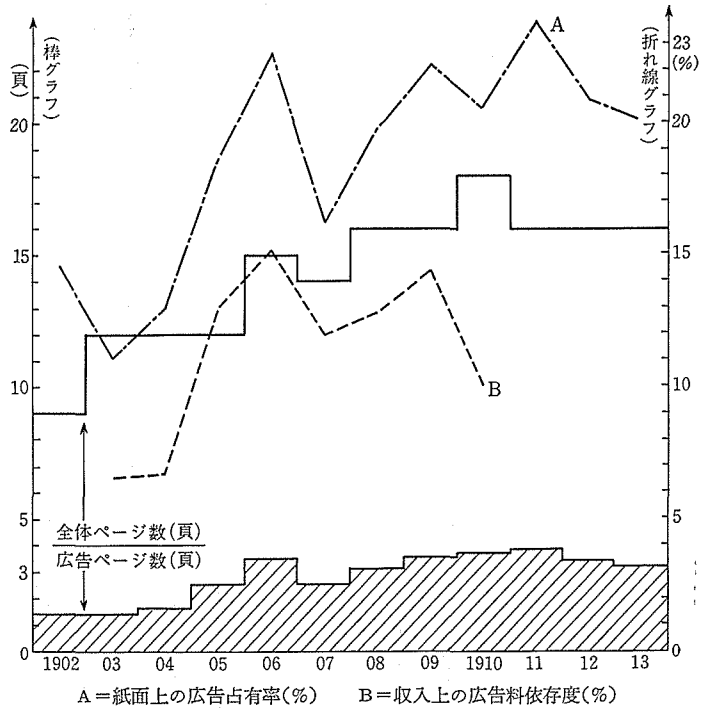
〔表Ⅳ〕は、大戦まで続いた紙面構成が確立する一八九七年から一九一五年までの見出し総数の変化と、記事形式(「論説」「詩歌」「漫画」「小説」「雑録」その他)の内訳の変化を示したものである。通常『真相』の紙面はタイトル頁を含む最初の四頁が政治風刺で、それに続く四頁から一〇頁が娯楽欄と名付けられていた。しかし、娯楽欄にも政治論文、社会主義

者列伝、文献アンソロジー、政治詩歌などが含まれており、必ずしも厳密な配列は施されていない。見出し総数について見れば、一九一一年まで上昇傾向を示すが、購読者数が最高を記録した一九一二年以降急速に減少に転じた。情報の絶対量においても、一九一二年まででこのメディアの最盛期が終ったことが確認できる。さらに、記事形式の内訳から判ることとは、一九世紀において全体の半数を占めていた政治論説の急速な減少が、漫画の増加と対照的な形で生じたことだ。両者の比率が逆転するのは、一九〇二年だが、同年ミュンヘン党大会では『真相』が以前のように多くの啓発的論説を載せること^②が要求されている。だが、この提案は十分な支持を得ることなく、論説の減少は一九〇九年まで続き、漫画五・三パーセントに対する論説九・二パーセントまでに至る。しかし、一九一〇年以降、論説は二〇パーセント台に回復し、漫画も四〇パーセントを上下する一定の均衡状態に到達した。漫画の増加が購読者数の増大、組織化の進展と歩を合せており、組織化の達成後、一種の固定化が生じたと考えらるならば、この時期に『真相』が党勢拡大の外向的メディアから組織内向的メディアに変質したことを意味するであろう。と言うのも、漫画つまり直観的、可視的コミュニケーション手段が非党員層への宣伝において示す有効性は、論説と比較して疑う余地がないからである。

次に質疑応答欄、つまり投書欄の扱いについて言及しておこう。一九二九年『真相』五〇周年特別号の指摘どおり『真相』が読者の積極的参加の、つまり編集者と読者の共同作業の産物であったとすれば、その象徴は質疑応答欄であったはずだ。『真相』はこれを世紀転換期以降採用するブルジョア雑誌に先駆け、一八九〇年一〇五号から最終頁に掲載した。しかし一九〇二年、広告欄が最終頁に設けられると、その紙面は浸食され始め、新聞局創設の一九〇七年を境に常設の地位を失った。先に論じた如く、新聞局体制を機関紙の中央集権化の帰結と見做すならば、それも故無しとは言えない。

一方、これを駆逐した一般広告については、ラッサール以来の広告嫌悪は党内に根強く、商業紙との差異を強調する必要からも広告は厳しく制限されてきた^③。しかし機関紙の個人購読が一般化してくると、割高な機関紙に対する不満が生じてきた。ついに一九〇一年、リューベック党大会では『真相』に広告欄を設けることが提案され^④、それからわずか七年後、

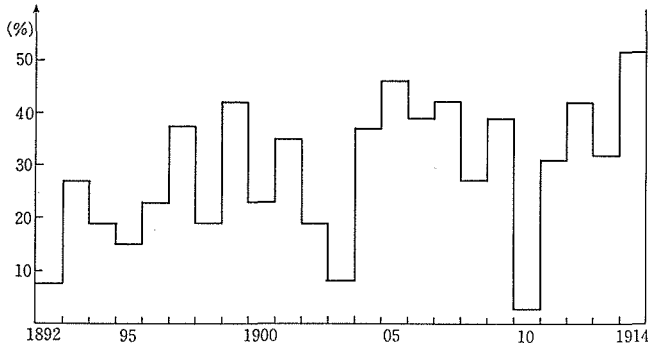
〔表Ⅴ〕 広告量と広告占有率の変遷



いよう。一九一三年、イエナ党大会で『真相』のいわゆるペテン、広告がもはや掲載されないよう党大会が努めてほしい」と提案された様に、「身長増伸法」だの「鼻型矯正器」、「毛髪活性化櫛」さらには「宝くじ」などの怪しげな広告が横行した背景には、大資本側のポイコットや官憲の敵意などによる広告募集の疎外状況が存在していた。しかし、そうしたペテン

一九〇八年ニュルンベルク党大会では、党の品位を損うような広告の掲載に規制を加えるよう提案^④が出されるまでに至った。「表Ⅴ」は、一九〇二年の一般広告採用以降、各年度六月号で広告が全紙面に占めた平均頁数と占有率(A)及び『真相』収益中の広告料依存度(B)を示した。占有率と依存度の相関は当然として、両者の変動は以下の事実を示す。一九〇五年までは顕著な増加が見られるものの、それ以降は停滞し、広告量に限って言えば、「表Ⅳ」で示した見出し総量と同様一九一二年を境に減少に転じている。その限りでは、SPD機関紙の体制内化の指標として、広告収入の増加を過度に強調することは出来ない。『真相』誌上に頻出する「業者に紹介することで、我々の広告欄を援助するように親愛なる購読者にお願ひする。」^⑤という告示も、むしろ広告募集の困難さを示して

〔表Ⅴ〕 テーマ分類(国際問題登場比)



〔註〕 タイトル頁に、外国人及び外国のシンボルが登場したものは、内容の如何を問わず「国際問題」に分類したので、「国内問題」とダブル・コードしたものもある。

広告さえ一九〇五年以降目につく、カメラ、毛皮、ピアノ、空気銃、蓄音器から「話し方教本」「社交ダンス独習教本」に至るまでの広告同様、大衆社会で一般化する都市型生活、消費の構造―あるいは虚構―の成立を示唆していると言えよう。第一次大戦勃発時には、戦債募集広告とともに「支払いは平和になってから！」と謳う信販広告さえ見出し出すことができる。

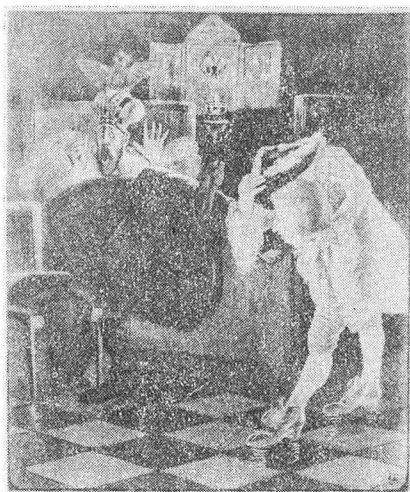
(三) カテゴリー分析

凡そマス・メディアを使った政治宣伝とは、思想・信条の改変効果よりも政治的先有傾向を具体的行動に結実させる顕在化効果、または補助効果に、その機能の本質を有する。故に宣伝内容の分析が明らかにするのは、メディアがその受け手に対して如何なる方向付けを行ったか、つまり「何を考えるべきか」を読者に認知させる議題設定内容である。以上の限界を踏まえた上で『真相』誌上に展開された大衆プロパガンダのカテゴリー分析を行い、その性格に考察を加えたい。その際、分析の資料には、特に編集部「時事に対する態度表明」④として表紙を飾ったタイトル漫画を利用する。分析の都合上、国外問題と国内問題に大別して議論を進めたい。

① 内政志向政党論再考

G・A・リッターが「大多数の党員にとって外交問題は一九一四年まで依然として彼らのノーマルな視野の外にあった」④と断じた如く、SPDに関して、外交への関心に乏しい内政志向性が繰り返し論じられてきた。

〔表Ⅴ〕は一八九二年から一九一三年までのタイトル漫画に、外国人および

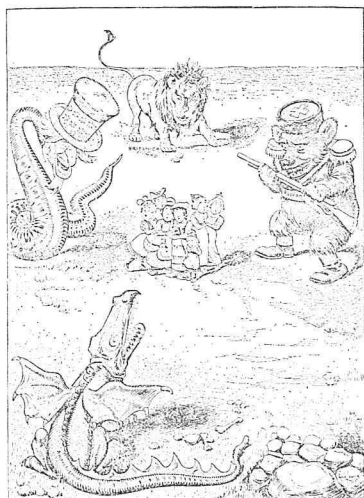


⑥ ニコライ 2 世とルイ 16 世 “W. J.” 1907. 7. 25 ←—— “S. M.” 1906. 6. 16

国際問題が登場した比率の変動を示したものである。これを見る限り『真相』は外交問題や国際的危機に敏感に反応したと言えよう。つまり、一八九九年（ボーア戦争、北清事変）、一九〇四—〇七年（日露戦争、第一次ロシア革命、三国協商成立）、一九二一—二二年（アガデイル事件、バルカン戦争）などの高い比率から外交問題軽視を読み取ることは難しい。とすれば、問題となるのは、情報の量でなく質と言えよう。世紀転換期の風刺漫画雑誌を比較研究した M・ブライヒは、『真相』誌上で論及、紹介された外国新聞の種類と登場頻度の極端な少なさを指摘しているが、この事実は『真相』が海外情報を収集する際の情報源の問題として浮び上がる。つまり、独自の海外通信網を持たない以上、外国新聞か国内商業紙に情報を依存せざるをえない。国際問題を扱った『真相』の漫画がブルジョア誌の漫画としばしば酷似した主題と形式を採用したことの原因はここにもあろう。特に、第一次ロシア革命を報じた『真相』と『ジンブリチスムス』の漫画（イラスト⑥）の同質性は、国際問題における「社会主義」的視点の存在に疑問を投げかける。さらに個別事例を比較検討せねば結論は出ないが、それは本稿の枠組を越える。ここでは唯、国外事件の報道において『真相』と他のブルジョア漫画誌に類似性があったことを確認すればよい。たとえば、登場頻度の高いロシア、



⑧ ドイツ「帝国」シンボル：角付き兜(鷲)
『世界政策』
(W. J., 1904, Nr. 459)



⑦ 「列強」のシンボル操作
(左下のドラゴンはアナーキズム)
(W. J., 1905, Nr. 496)

イギリス、フランス、アメリカの四ヶ国については、明確な価値判断をともなったシンボル操作が行なわれた(イラスト⑦)が、ロシアコサック兵(ヒグマ)、イギリスジョン・ブル(ライオン)、フランスマリアンヌ(ニワトリ)、アメリカ

II アンクル・サム(バッファロー)を基本型としたこのシンボル体系はブルジョア誌と共有されていた^⑨。その意味では『真相』が独自の外交解釈を展開する可能性はシンボルのレベルで制限されていたと言える。

さらに国際問題にドイツの立場を表現する際のシンボル操作では、帝制のシンボルII「角付き兜」・「鷲」(イラスト⑧)と国家のシンボルII「ゲルマニア女神」が使い分けられ、「角付き兜」の姿や宰相、皇帝の引き起す失政に困惑する「ゲルマニア女神」の姿が描かれた(イラスト⑨)。ここに『真相』の国民意識を読み取ることは容易であろう。そして、党員大衆の対外意識形成に大きな影響力を持ったであろう『真相』の漫画が、帝国主義時代の国民国家と階級の間にあったアポリアを「角付き兜」と「ゲルマニア女神」を操作することで避けて通ったとすれば、第一次大戦を伝えるタイトル漫画が「民衆」の愛国心を鼓舞したことも当然の帰結であったと言える(イラスト⑩)。この意味においては、外交問題も一種のスクランダルと呼ぶべきであり、確かに「ノーマルな視野の外」にあったと言える。



⑩「さあ、息子たち、やっつけろ！
今は打殺だけを手伝え！」
(W. J., 1914, Nr. 733)



⑨ドイツ「国家」シンボル：ゲルマニア女神
『ある田園風景』
(W. J., 1906, Nr. 517)

② スキャンダル・ジャーナリズム論

「これほど意識的かつ体系的な方法で、しかも一切の躊躇なしに大衆を煽り立てた新聞は今だかつて存在しなかった。……中略

……『全ての悪は上から生じる』とはベールが一八九六年四月の帝国議会の討議の際、述べた言葉だが、SPDはこの原則に支配されている」と、一八九〇年代当時、SPD新聞をH・ブラウンは評した。つまり、民衆はスキャンダルを通じて、初めて政治に参加する大衆となるが、SPDこそスキャンダル・ジャーナリズムを組織的に利用した最初の政党であった。

『真相』の国内問題への言及も徹頭徹尾スキャンダリズムに彩られていたが、その焦点が何処にあったかは、鎮圧法廃案以降『真相』が被った三度の名誉毀損裁判から推測できる。その原告は、東アジア遠征軍、プレスラウ警察、カトリック教徒会議であり、この軍人、警官、司祭に「美食のブルジョア」と「肥満のユンカ」を加えたものが『真相』の風刺の主要な標的であった。^⑬

〔表Ⅶ〕は、タイトル漫画に二度以上、年を隔てて登場した主要な人物の一欄表である。整理の都合上、四年おきのサンプリングで洩れた人名は省略したが、以下三点が確認できよう。第一に、殆どスキャンダル批判の対象者に限られ、SPDの指導者が登場

〔表Ⅶ〕

登 場 人 物	1897	1901	1905	1909	1913
O. v. Bismarck	4				
A. Bebel		1			1
T. v. Bethmann Hollweg				1	3
B. v. Bülow	1	8	5	5	
A. Gröber					2
D. Hahn	2	1	1		
Ch. Hohenlohe-Sch.	2				
H. v. Kanitz	4	4			
W. v. Kardorff	3	2	2		
Leo XIII		1			1
J.v. Miquel	3	1			
J. v. Mirbach-S.	2		1		
Th. v. Moeller			4		
Nikolaus II		1	8	3	
R. Oertel			1		1
B. v. Ploetz	1	2	2		
A. v. Posadowsky			2		
H. Stinnes			2		
C. F. Stumm-H.	5				
A. Thyssen			2		
A. v. Tirpiz				1	
Wilhelm II				3	5
総 登 場 人 数	25	22	24	13	7

ためには攻撃対象の集中が有効だが、それは風刺の時事性を犠牲にする。一九〇九年ライプチヒ党大会で、『真相』は時事的風刺雑誌の性格を強めるべきだと批判されたが、それは組織の原理が宣伝の原理に優越したことの反映と言えよう。第三に、現体制の象徴として批判の矢面に立つ人物が宰相から皇帝へ移行したことが判る。一九〇八年デリー・テレグラフ事件以前は、イギリス王エドワード七世やロシア皇帝ニコライ二世と対置して風刺されたのは、ドイツ皇帝ではなく宰相ビュローであった。漫画でヴィルヘルム二世を登場させる場合は、名誉毀損罪を恐れて「大公殿下」Serenissimusなどの異った称号が付けられていた。しかし、一九〇九年以降、ブルジョア誌同様、皇帝への風刺は公然化し、一九一三

することは稀であった。一九一二年の選挙記念号を一つの起点として、以後SPDのカリスマ的指導者（ラッサール、マルクス、エンゲルス、リープクネヒト、ベーベル）の肖像がタイトル頁を飾る現象が生じる。「宣伝政党」の組織化段階ではスキャンダリズムが優先され、その最終局面に至ってカリスマの利用が始まった。それは『真相』が外向的メディアから内向的メディアへ変質した時期と重なる。第二に、登場人物数に目を向ければ、批判対象の特定化、集中化が読み取れる。一八九七年の登場人物は二五名を数えたが、一九〇五年以降減少して一九一三年には七名に絞られた。組織の凝集性を高める

年には帝制批判は皇帝個人への攻撃という色彩を強めたことが判る。^④

以上の考察を小括すると次のようになる。確かに第一次大戦までスキャンダルリズムは継続したが、その批判内容は集中化し硬直化へ向かったことが確認できる。その限りでは、皇帝への激しい風刺も、返って体制の構造上の矛盾を大衆の目から逸す商業主義的スキャンダルリズムへの接近と見做すことも可能であろう。

もっとも、こうした考察とは別に『真相』の意義を、八時間労働制、普通選挙権などの要求や「未来国家」を表現した少数のイラストに求める道もあろう。F・クニリーは『真相』を次のように評した。「現実的に描かれた絵物語で当時の資本主義社会の搾取システムを暴露し、寓意的な絵画とコマ漫画で社会主義的未来国家を宣伝し、戦術上の寓意によって近接未来の目標へ煽動した。」この解釈は、正しくかつ誤っている。搾取システムの可視化の成功において正しく、「未来国家」の図式化の失敗において誤っている。ただし、未来像の曖昧さは、大衆組織の形成期には宣伝に役立つこそすれ、マインナス要因とならない点で再び正しい。それにしても、社会主義社会を明白に対置できない資本主義批判の宣伝は、それが組織化という形で成功すればするだけ宣伝の意味を空洞化することにならないであろうか。次に『真相』誌上の「社会民主主義」シンボルの変遷を通じて、SPDの発展にともなう宣伝の果す役割の変化を論じておこう。

(四) キー・シンボル分析

大衆社会において政治システムを作動させているのは、シンボル操作によって生じる「要求・支持」のイメージと「政策」のイメージである。政治学上の用語を使えば、インプットとアウトプットとなるが、その社会関係の意味に関して直接観察が可能なデータは政治的シンボルである。

『真相』は隔週刊誌として購読される以外に、「メーデー号」のように党勢拡大のためのパンフレットとして配布された。^⑤ 党大会でこの「メーデー号」が取り沙汰された理由は、この特別号が党内外に運動の自画像を示し、その強度と成果を誇



⑪ 1892年

まり「社会民主主義」自身のシンボルが確立するのは、一八九八年以降であり、自由の象徴たる赤いフリジア帽（ジャコバン帽）を被り、波

示する目的を持っていたからであろう。そこで描かれたシンボルこそ、大衆の目に映った「社会民主主義」に他ならない。一八九〇年代前半のイラストは宗教画の影響を色濃く残している。そこでは、剣を持った天使が運動の守護者として登場するが、SPDとこのシンボルの関係は明確ではない（イラスト⑪）。一八九三年のメーデー号の「自由の帰服」と題された象徴画では、『自由』の玉座から女神が党員に祝福を与えているが、その周囲には、マルクス、ラッサール、ダーウィン、ロベスピエール、クロムウェル、F・ヘッカーや、農民戦争時の「農民靴」などが配置された（イラスト⑫）。このことは、「社会民主主義」が大衆レベルで「社会主義」に還元できるものでないことをよく示しているが、まだSPDと「マリアンヌ」の同一化は生じていない。つ



⑫ 1893年（W. J., 1893, Nr. 183）



⑭ 1907年 (W. J., 1907, Nr. 536)

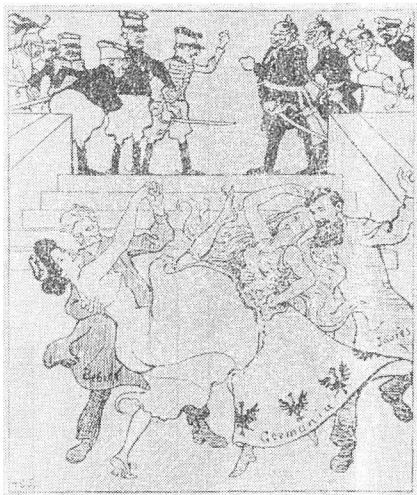


⑮ 1898年 (W. J., 1898, Nr. 317)

打つガランをまとった乙女に「社会民主主義」と銘打ったシンボルが確立した(イラスト⑬)。もちろん、これはフランス共和国のシンボル「マリアンヌ」の借用であって、『真相』の「マリアンヌ」はF・D「フランス共和国」とS・D「社会民主主義」の表記によって識別された。また「マリアンヌ」(イラスト⑭)はフランス共和主義に対するSPDの兄弟意識の反映でもある(イラスト⑮)。だが、SPDのシンボルである「戦うマリアンヌ」は、一九〇七年を境にして後退し(表Ⅷ参照)、一九〇八年のメーデー号の表紙に登場したのは、流行服に身を包んだ女性(イラスト⑯)であった。ついに一九一一年には、豊饒と繁栄の象徴たる「花冠」を被った「ゲルマニア女神」と交歓するベール、フォルマーの姿(イラスト⑰)が描かれた。こうした「平和な田園詩」が党の本質を裏切っているか否かを議論することは無意味だが、そこに「城内平和」の予兆を認めることは出来よう。「マリアンヌ」自体は消滅せず、階級性を脱して本来のコードに戻って行った。⑮ 例えば一九一二年の「聖霊降臨祭号」(イラスト⑱)で人類の進歩と解放を祝福するマリアンヌの「花冠」の中に埋れた「ジャコバン帽」は、「戦うマリアンヌ」のそれと同じものではあるまい。重要なことは、「戦うマリアンヌ」が退けられた時期が、新聞局設置に明らかな宣伝の組織化の完成期と一致することである。一体、



⑭ 1908年 (W. J., 1908, Nr. 568)



⑮ マリアンヌと踊るベーベル
ゲルマニアと踊るジョレス
(W. J., 1905, Nr. 496)

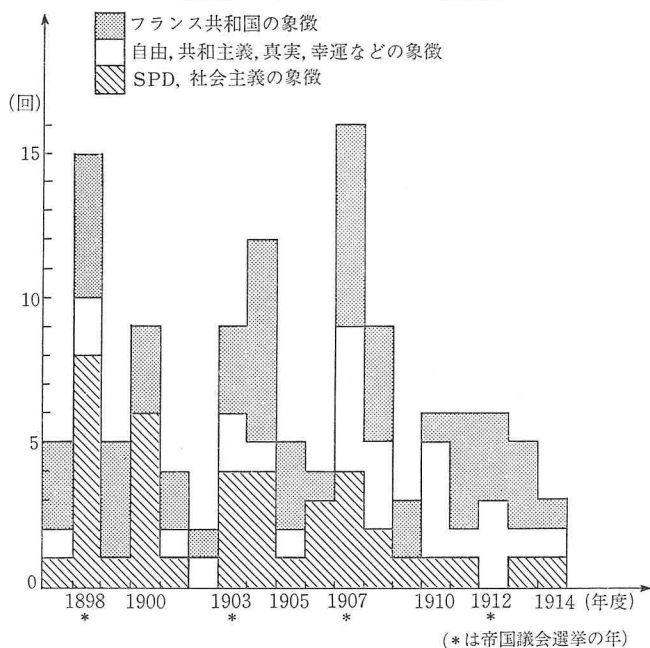


⑯ 1912年 (W. J., 1912, Nr. 674)



⑰ 1911年 (W. J., 1911, Nr. 646)

〔表Ⅷ〕 マリアンヌ・シンボル登場数



ン、嵐の中のボート、などのシンボル群の一例に過ぎず、「宣伝政党」のシンボル操作が自己表現においては比較的緩やかな体系を形成していたことが判る。このことは、『真相』が党内理論闘争の外に身を置いた機関紙であったことを考慮しても、多くの分派を内包した巨大な傘の如き存在であった第二帝制期SPDの統合の柔軟性の反映と言えよう。

これとは別に、読者が自己を投影する対象として描かれた「若い戦士」や「巨大なプロレタリアート」も、SPDのシン

「マリアンヌ」こそ百年の伝統を持つ革命のシンボルであった。伝統的シンボルの使用は、その受容者に伝統的な美意識・価値観を変えなくてもよいという安堵感と保証を与える。それが、シンボルとそれに負荷された新しい意味の受容を容易にする。「宣伝政党」はこれを有効に利用したが、巨大組織に成長したSPDはその宣伝が切り開いた大衆文化の中にアイデンティティを確立しており、もはや「マリアンヌ」という借り物のシンボルに固執する必要はなかった。今度は巨大な組織が伝統的シンボルに替って読者の帰属意識に安堵感を与えるからである。帝国議会選挙の年の「マリアンヌ」＝SPDシンボルの登場頻度の変化は、このことをよく示している(表Ⅷ参照)。さらに「マリアンヌ」以外でSPD、又は「社会主義」のシンボルとして利用されたものを検討しておこう。赤

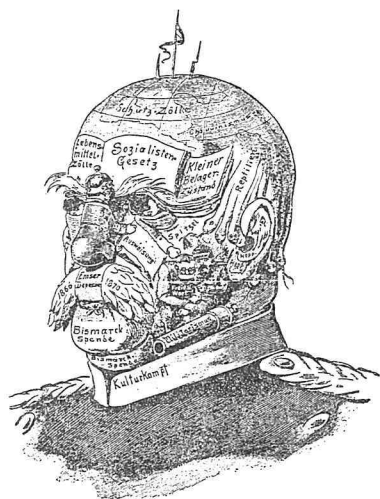
旗も利用されたが、それは太陽、風車、機関車、ライオ

要はない。なぜなら、そうした引用は理解される必要などなく、ただ、と言うのも、ラッサールの『学問と労働者』（一八六三年）、W・リープクネヒトの『知は力なり』（一八七三年）に象徴されるSPD運動の側面、そして恐らく主要側面からすれば、「知識」あるいは「教養」が政治上の市民的平等を求める人間に強烈な吸引力を持っていたことは疑い得ないからである。『真相』の副題に「娯楽と知識のための付録つき絵入り滑稽風刺雑誌」と書かれる時、「知識」の比重は大きい。そして「知識」は必ずしも論理性を必要とせず、ただそれを効果的に引き出すために歴史的な広がりを持った視覚言語を必要とした。『真相』のシンボルが市民革命期以来のシンボルの借物である必然性はここにもある。そうしたシンボルの典型が、一八四八年創刊の『クラデラダーチュ』が始めた「三本の頭髮」を持つビス



⑭ デューラー「騎士，死，悪魔」
パロディー
(W. J., 1903, Nr. 444)
SPD(騎士)の周囲には、軍国主義、資本主義、アナキズム、坊主支配がいる。

ボルと見做してよからう。これには、古代神話のプロメテウスやアトラス、デューラーの銅版画の騎士像(イラスト⑭)などのバリエーションの他に、ゴルゴダの丘に向かうキリストからシェークスピア劇の主人公まで投入された。こうした古典、神話、文学からの引用の意味は重要である。宣伝は平均的読者の「知識」を前提とする。その際、漠然とした歴史的・文学的引用が不正確であろうと、読者にとつて究極的には無意味であろうと、その効果を問題にするか



⑯ (W. J., 1898年 Nr. 315)



② (H. J., 1917年, Nr. 819)

『ロシアにおける平和の闘争』
『真相』にとって10月革命は、「クマ」＝
レーニンと「鷲」＝ケレンスキーの闘争で
あった。「ソビエト」は何処にもない。

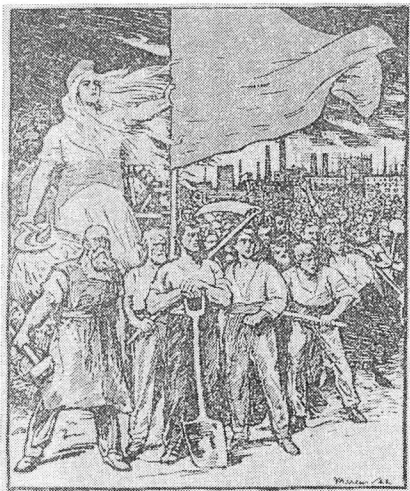


④ SPDの「未来国家」

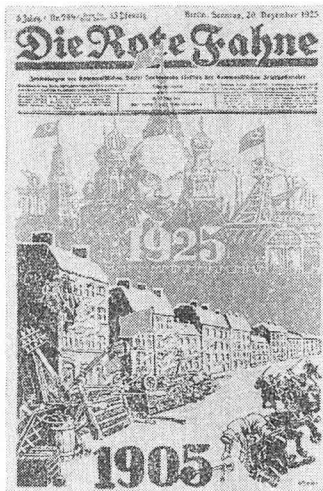
F. Wendel, *Der Sozialismus in der
Karikatur von Marx bis MacDonald*,
Berlin, 1924, S. 38.

ペーベル(右)とリープクネヒト(左)の示す
「未来国家」(Zukunftsstaat)。『クラデラ
ダーチュ』誌の風刺。

マルク像であり、『真相』のビスマルク像は例外なくこれを踏襲した(イラスト②④)。形式が内容を規定するの謂は、この際、正しい。『真相』誌上のロシア革命報道がブルジョア誌上のそれと酷似したものであったことは既に触れた。ここで使用された「革命」対「絶対主義」の図式は、自らを「マリアンヌ」に擬したSPDとしては当然であったが、そのシンボルの規定性こそ、『真相』がロシア革命の中に、あるいはそれが生んだ「ソビエト」の中に、一片の社会主義革命の可能性すら見い出せなかった事情を説明する。だから、ルクセンブルク等の左派の大衆ストライキ論の引き金となった第一次ロシア革命を、『真相』が厭うべき流血のスキヤンダルとしてしか描けず、一人の社会主義者の姿も発見できないのは当然であった。④同様に、『真相』が「未来国家」を明示できず(イラスト②④)、「進歩」の幻想のみ再生産した事実も、「社会主義」に固有なシンボルの不在によって確認できる。結論から言えば、伝統的シンボルの継承と独自のシンボルの不在にこそ、『真相』が大衆を組織できた原因と限界があった。そ



㉔「共和国の擁護」(W. J., 1922, Nr. 934)



㉕“Die Rote Fahne”『赤旗』1925, Nr. 294.

して、この歴史的帰結は、第一次大戦開戦以後、SPDと党員大衆が取った行動として顕在化した。組織化を達成し硬直化した宣伝は、新しいシンボルを採用することが出来ず、ロシア一〇月革命ですら「社会主義革命」として表現することが出来なかった(イラスト㉔)。こうした革命イメージの食困、つまりシンボルの不在は、SPDの革命情況への対応を極めて困難なものにした。逆にSPDから分裂したドイツ共産党や独立社会民主党が一時的にしろ革命をリードできたとすれば、ついに『真相』がソビエト革命から汲み上げなかった社会主義のシンボルを「レーテ」や「レーニン」の中に見い出したからであろう(イラスト㉕)。これに対して『真相』がその武器庫から引き出したシンボルは、一度蔵入れた「マリアンヌ」であった(イラスト㉔)。然り、ドイツ革命は「レーニン」と「マリアンヌ」の戦いであった。しかしこれについては、分析の枠をワイマール期まで広げ、稿を改めて論じねばなるまい。だが、一応の見通しとして次の如く言えよう。「大衆組織政党」SPDは、新時代の「宣伝政党」、つまり共産党とナチス党の挟撃に晒され、革命シンボルの不在、社会主義イメージの食困に悩むことになる。このことは、宣伝によって創出された「大衆組織政党」が、今度は組織によって、組織のために宣伝

を支えねばならなかったことを意味しよう。つまり「宣伝政党」は「宣伝の年金生活」に入った。『真相』の購読者数の急速な減少は、その象徴であろう。

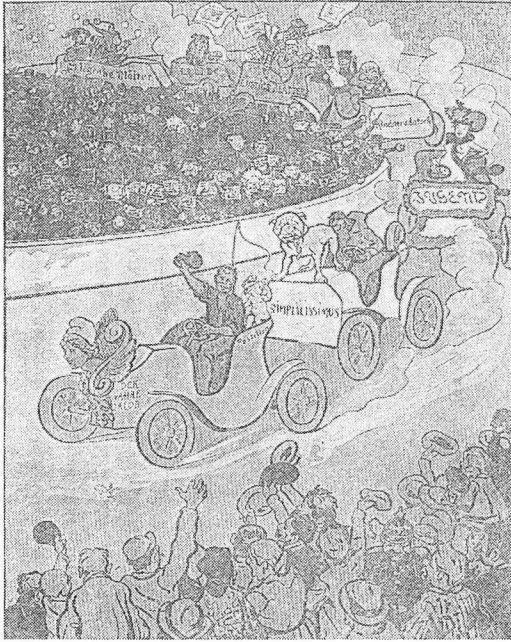
- ① M. Haeckel, *Der Wahre Jacob : Lirik und Prosa 1884-1905*, Berlin-O., 1959, S. 5f.
- ② F. Mehring, *Gesammelte Schriften* Bd. 2, Berlin-O., 1960, S. 664f.
- ③ 足利未男・平井俊彦・林功三・野村修司『エノハム社会民主主義者(下)』(『ニルヌヤ書房・一九六九)五一四頁。
- ④ W. J., 1890, Nr. 112, S. 900.
- ⑤ H. J. Schütz (Hrsg.), *Der Wahre Jacob : Ein halbes Jahrhundert in Faksimiles*, Bonn-Bad Godesberg, 1977, S. 7f.
- ⑥ K. Koszyk, *Deutsche Presse im 19. Jahrhundert*, Berlin, 1966, S. 267-275.
- ⑦ W. J., 1928, *Festschrift*, S. 8.
- ⑧ A. Hall, *Scandal*, p. 7.
- ⑨ W. J., 1900, Nr. 101.
- ⑩ A. Hall, *op. cit.*, p. 15.
- ⑪ 例へば『ニルヌヤ書房のエノハム演説など』 W. J., 1890, Nr. 112, S. 901.
- ⑫ W. J., 1888, Nr. 58, S. 464.
- ⑬ *Prot. 1890*, Halle, S. 35.
- ⑭ H. J. Steinberg, *Sat. Zeitschriften*, S. 77.
- ⑮ H. Moos, *Zur Soziologie des Witzblattes*, München, 1917, S. 62.
- ⑯ 『ニルヌヤ社会民主主義者』 A. T. Allen, *Satire and Society in Wilhelmine Germany : Kladderadatsch and Simplicissimus 1890-1914*, Kentucky, 1984.
- ⑰ H. J. Schütz, *op. cit.*, S. 8. ヌーデー小説コンテスエツツ W. J.,

- 1900, Nr. 359, S. 3226 f. なつて 雑誌としてユーニベル・メーリング等が加へた。
- ② P. Mayer, *Bryuno Schöenlank 1859–1910 : Reformen der sozial-demokratischen Tagespresse*, Hannover, 1972, S. 65–69.
- ③ G. A. Ritter, *op. cit.*, S. 57–59.
- ④ S. M. Braig, *op. cit.*, S. 121.
- ⑤ *Prolet. 1902, München*, S. 111.
- ⑥ 日・ソ・ハートマン・ヒューゲン『世界』の訳題主編雑誌。 *Prolet. 1893, Köln*, S. 115 f.
- ⑦ 一七〇二年四月廿五日の輸入。 M. Groschopp, Die Proletarische Klassenorganisation als Kommunikationsstruktur der deutschen Arbeiter vor 1914, in: *Literatur und proletarische Kultur*, Berlin-O., 1983, S. 99.
- ⑧ K. Völkerling, *op. cit.*, S. 26.
- ⑨ *Prolet. 1913, Jena*, S. 256 f.
- ⑩ *Ibid.*, S. 187 f.
- ⑪ “Gegen den Zairismus” (*W. J.*, 1914, Nr. 733, S. 8442) “An unsere Brüder im Felde.” (*W. J.*, 1914, Nr. 734, S. 8450)
- ⑫ *Prolet. 1908, Nürnberg*, S. 227. へーゲル・騎士団・ヘンターの政治雑誌雑誌雑誌。
- ⑬ *Prolet. 1902, München*, S. 82. Anzug 50.
- ⑭ G. Langemeyer, *Bild als Waffe : Mittel und Motiv der Karikatur in fünf Jahrhunderten*, München, 1984, S. 10.
- ⑮ *Jubiläums-Fahrgang : 50 Jahre Wahre Jacobs*. M. Häckel, *op.*

- cit., S. 12 f.
- ② K. Hieckethier, Karikatur, Allegorie und Bilderfolge : Zur Bildpublizistik im Dienste der Arbeiterbewegung 1848–1918, in : P. v. Rüden (Hrsg.), *Beiträge zur Kulturgeschichte der deutschen Arbeiterbewegung 1848–1918*, Frankfurt a. M., 1981, S. 125.
- ③ W. Schröder, *op. cit.*, S. 205–209.
- ④ M. Wittwer, *Das deutsche Zeitungsessen in seinen neueren Entwicklung*, Halle, S. 31.
- ⑤ *Proz.* 1901, *Lübeck*, S. 91, An. 51.
- ⑥ *Proz.* 1908, *Nürnberg*, S. 178, An. 61.
- ⑦ *W. J.*, 1902, Nr. 414, S. 3774, 4330°
- ⑧ *Proz.* 1913, *Jena*, S. 187, An. 56.
- ⑨ A. Hall, *Scandal*, p. 36.
- ⑩ *W. J.*, 1914, Nr. 741, S. 8545.
- ⑪ H. J. Schütz, *op. cit.*, S. 8 ; M. Haeckel, *op. cit.*, S. 12.
- ⑫ G. A. Ritter, *op. cit.*, S. 169.
- ⑬ R. Fleischer, *Revisionism and Empire : Socialist Imperialism in Germany 1897–1914*, London, 1984, S. 34 f.
- ⑭ M. S. Braig, *op. cit.*, S. 209.
- ⑮ トンシムト語を以て「社会主義」を意味する語の起源については K. Hieckethier, *op. cit.*, S. 86–90.
- ⑯ H. Braun, *Die sozialdemokratische Presse*, Berlin 1896, S. 31.
- ⑰ *Handbuch des Verein Arbeiterpresse*, Berlin, 1914, S. 143.
- ⑱ O. Supper, *op. cit.*, S. 41 f.
- ⑲ *Proz.* 1909, *Leipzig*, S. 190, An. 24.
- ⑳ F. Wendel, *Wilhelm 2. in den Karikatur*, Dresden, 1928, S. 42 f.
- ㉑ I. Rieger, *Die wilhelminische Presse im Überblick 1888–1918*, München 1957, S. 16 f.
- ㉒ F. Knüll, *op. cit.*, S. 362.
- ㉓ A. Hall, *Scandal*, p. 31.
- ㉔ *Proz.* 1905, *Jena*, S. 125, Antrag 95 ; *Proz.* 1909, *Leipzig*, S. 190, Antrag 19.
- ㉕ M. Agallou, tran. by Lloyd J., *Marianne into battle : Republican imagery and symbolism in France : 1789–1880*, Cambridge, 1979.
- ㉖ *Illustrierte Geschichte der Deutschen Revolution*, Berlin, 1929, S. 81.
- ㉗ 『真相』上の本紙を以て「労働者階級闘争」を意味する「普通の」人間解放の歴史を論議する「労働者」の「労働者」K. Völkerling, *op. cit.*, S. 159.
- ㉘ K. Hieckethier, *op. cit.*, S. 187.
- ㉙ H. Scherer, *Bürgerlich-oppositionelle Literaturen und sozialdemokratische Arbeiterbewegung*, Stuttgart, 1974, S. 1–9.
- ㉚ H. Moos, *op. cit.*, S. 18 f.
- ㉛ H. Weber, Die Tradition der politischen Karikatur und ihre Aussage 1905 bis 1907, in : Stern, L. (Hrsg.), *Despoite in der Karikatur : Die russische Revolution 1905 bis 1907 im Spiegel der deutschen politischen Karikatur*, Berlin-O., 1967, S. 33 f.
- ㉜ ロシア革命運動をトロツキが意味する「真相」の「労働者」の「労働者」の「労働者」の「労働者」K. Völkerling, *op. cit.*, S. 165 f.

結びにかえて

— 宣伝Ⅱ文化と大衆社会 —



㉔ (W. J., 1904, Nr. 481)

マス・メディアの成長が大衆社会の成熟度のバロメーターであるとすれば、確かに、第二帝制社会は大衆社会の成立期であったと言える。そして、大衆社会とは、伝統的な共同体生活から切り離された民衆が大衆文化の創出を通じて再編された社会であると定義出来る。とすれば、SPDの発展は、社会変動下の「民衆」を大衆として組織化した過程であった。それを「^{サブ・カルチャー}下位文化」形成の過程と呼ぶとしても、その「文化」とは、「宣伝」の同義語と言って差し支えない。な

ぜなら、民衆文化の機能が主体的な経験を共同体内部で追体験し経験の沈殿を共有するのに対し、大衆文化の機能とは情報環境の組織化、換言すればヘゲモニー関係の確立にあるからだ。そして第二帝制期SPDこそ、情報の独自の交換回路とシンボル循環システムの創出によって大衆政治とその支配メカニズムを用意したことにおいて、大衆社会成立期の「宣伝政党」であった。

この「宣伝政党」の核となったメディアが『真相』であったとすれば、『真相』もまた大衆社会化推進のメディアであった。一九〇四年『真相』四八一号は「坊主どもの驚愕」(イラスト㉔)と題する漫画を掲げた。一方の側に憤る「フロックコート」の一群を、他方の側に歓喜

する大衆を配し、その間を『真相』を先頭に『ジンプリチシムス』、『ユーゲント』、『クラデラダーチュ』……と続く漫画雑誌が行進する様が描かれている。宰相ビュローに「風刺漫画雑誌は投石で窓を破る悪童だ」と言わしめた如く、風刺漫画雑誌こそ、伝統的権威への挑発者として一九世紀マス・メディアの華であった^③。比類なき読者数を誇った『真相』が他のブルジョア誌に示した、この連帯表明は、大衆文化に対する自負と自信の表現であった。また、絵と活字の混在をその特徴とする風刺漫画雑誌は、従来、活字文化つまり近代的教育に縁のなかった民衆を活字文化へ導く上で重要な役割を果たした。教養と結合した特権を有する「フロックコート」たちが漫画を蔑視、憎悪したのは、絵で叙述が理解されることで活字文化に君臨してきた彼らの既得権が崩される可能性を感じたためでもあろうか。

それにしても、この時代の漫画雑誌や低俗新聞等のマス・メディアが階級闘争の牙を抜いたとする大衆文化論があるとするれば、それに対しては、『真相』編集部の次のような回答がある。『真相』はユーモアなきユーモア雑誌であるという『社会主義教養人』*Sozialistischer Akademiker*の主張は『真相』の創刊以来存在してきたものだ。……中略……だが、実際『真相』はごく一般的な意味でのユーモア雑誌では決してなく、同志のための闘争雑誌である。その上『真相』が芸術と娯楽の付録に大きなスペースを与えていることは賢明な同志の気を害することなどないはずだ。』(W.J. 1195, Nr. 212)つまり、政治闘争と芸術の平準化が並存した大量複製化時代初期の特殊なメディア環境の現象として、『真相』を使ったSPDプロパガンダの驚異的な成功があったと考えるべきであろう。その意味ではSPDの「宣伝政党」期が、伝統的な油絵の言語を宣伝ビラのイデオロムに翻訳することを可能にしたグラビア印刷技術の革新期、一八九〇年代と重なることは無視できない。そして「教養」「芸術」を平準化するマス・メディアの技術導入において、SPDが他の政党をリードしたのは、経済的・政治的不平等と並んで、民衆と教養市民層との文化的偏差の大きさが、SPDの乗り越えようとした対象であったからである。そのためにSPDは、自らを過去の文化的伝統の正統な継承者であり普及者であると主張したのであり、『真相』のグーテンベルク記念号(1899, Nr. 363)、ゲーテ特集号(1899, Nr. 336)、シラー特集号(1905, Nr. 490)

や、トルストイ (1900, Nr. 381) や R・ワグナー (1913, Nr. 689) の評伝、紹介記事などにその主張は明白に現われている。こうした「教養」の大衆化の方向性において「宣伝政党」は都市民衆を大衆文化の中に統合したのであり、その結果「大衆組織政党」へ移行して行ったのである。そして、この移行期に党大会で『真相』の印刷技術の遅れがしばしば批判されたことも「宣伝政党」の変質に起因しよう。SPDがその採用に遅れた写真印刷の技術上の革新は、風刺漫画雑誌の時代の終焉を意味していたが、ワイマール期のSPDは、それに替る公式のグラフ誌を持つことはなかった。

最後に、「宣伝政党」以後の『真相』に言及して本稿を終えたい。一九二一年『労働者新聞協会報』二〇五号は、時代の変化に適応していない『真相』の内容を厳しく糾弾する論文を載せた。^⑤しかし、購読者数が開戦前の四分の一に満たない『真相』の内容を戦前のそれと同列に論じることができない。

一九二三年一月一二日号をもって『真相』はインフレの中で休刊し、翌年一月一五日、替って発行地をベルリンに移した後継誌『進歩的笑々』Lachen Links が登場した。一九二七年、同誌は再び『真相』と改称されたが、大衆宣伝の新時代においてSPDが過去の栄光に囚われすぎていたことを示すに過ぎまい。第二帝制期『真相』は「実践」としての宣伝であったが、ワイマール期のそれは「価値」として虚構化された宣伝であった。

むしろ、「実践」としての宣伝をSPDから学んだ者は、『わが闘争』の著者なのかもしれない。ヒトラーは言う。「実際、マルクス主義の新聞が我々のブルジョア新聞から区別されるのは次の点である。マルクス主義の新聞は煽動者によって書かれ、ブルジョア新聞は文筆家によって煽動をやっていることとする。ほとんどいつも集会場から編集部へやってくるSPDのへば編集者は比類なく大衆を熟知している。」^⑥

『真相』と訳してきた Der Wahre Jacob とくく言葉は、「反語的には「偽物」を意味する言葉である。その言葉には、盲目の父を仮装によって騙し、兄エサウの祝福と家督を横取りした創世紀のヤコブ伝説が潜んでいる。

かつて一九〇九年、再刊二五周年を祝う『真相』は、輝かしい発展を振り返ってこう結んだ。「ヤコブは我等の赤旗の

下に集まる勇敢な仲間、今、この挨拶を送ろう。諸君、今まで同様、ヤコブを信頼し続けてください。ヤコブは二五年後、再び諸君の前に現れる時まで、闘争と勝利の中でこれからも諸君とともに歩むだろう。」^⑦

しかし、その祝福が二五年後に行なわれることはなかった。二四年目の年、一九三三年二月二八日、『真相』もヒトラー政権によって禁止された。人々はいつしか「真相」を語ることがを忘れ、ヒトラーのラジオ演説に耳を傾けていたのであろうか。

“Das ist der wahre Jacob !”

- ① ドイツ社会民主主義運動を「サブ・カルチャー」概念で捉えたのは、前掲G・ロー特であるが、この概念操作に対する批判としては、ヒトラー V. Liddke, *op. cit.*, pp. 3-20.
- ② H. Moos, *op. cit.*, S. 101.
- ③ K. Ricker, *op. cit.*
- ④ 一九〇五年イエナ大会への『真相』イラストの印刷技術批判(*Prot. 1905, Jena*, S. 125, Antrag, 95)以来、印刷技術の向上要求は、毎年6如く提案されている。これは善処の形跡がなく。(*Prot. 1906, Mannheim*, S. 113, Antrag, 37; *Prot. 1908, Nürnberg*, S. 178, Antrag, 55; *Prot. 1909, Leipzig*, S. 190, Antrag, 15; *Prot. 1911, Jena*, S. 153, Antrag, 35.
- ⑤ R. G., Eine erste Angelegenheit. in: *Mitteilungen des Vereins Arbeiterpresse*, Jg. 22 (1921), Nr. 206, S. 4.
- ⑥ A. Hitler, *Mein Kampf*, Bd. 2, *Die nationalsozialistische Bewegung*, München, 1938, 43 Auflage, S. 529. 邦訳、平野一郎・持積茂訳『わが闘争』下、角川文庫、昭和四八年、一四八頁。
- ⑦ W. J., 1909, Nr. 586, S. 6078.

(京都大学大学院生)

The State Monopoly of the Corn Trade in Rhaedestus

by

Yukio Nezu

Under the rule of Michael VII Ducas (1071-1077), the Byzantine Empire Government established a state monopoly of the corn trade in Rhaedestus, the main grain port on the Thracian shores. This incident provides valuable information for us to understand the political, economic and social situations that the Empire confronted at that time. In this paper, taking up two men, Nikephoritzes and Michael Attaleiates, we tried to examine the Government's real intention in introducing this policy and to find the main reason that this attempt soon met with failure. Nikephoritzes, a prominent figure in the Government, and Michael Attaleiates, the historian of the age, were personally concerned with this incident and had contrary opinions in this case. From this point of view, the situation at that time can be grasped.

In conclusion, Nikephoritzes' project was an attempt, by state control of economic life, to try to reconstruct the centralized state system to save the Empire from falling into crisis. And its failure was caused by the wide diffusion of the free trade system, accomodating the way of life of the provincial magnates who lived a semi-independent existence in their estates.

Die propagandistische Partei · SPD und das Witzblatt "Der Wahre Jacob"

von

Takumi Sato

Die wilhelminische SPD ist als eine propagandistische Partei darzustellen, wie sie bereits von Karl Kautsky in der "Neuen Zeit" von 1903 bezeichnet worden ist. Und von der Untersuchung der Wechselbeziehung zwischen Parteiorganisation und -presse her ist die propagandistische

Partei als eine Übergangsform von der Kaderpartei zur Massenpartei zu betrachten. In diesem Artikel wird "Der Wahre Jacob", das sozialdemokratische Witzblatt, als Material verwendet und seine Inhalte und Symbolik qualitativ und quantitativ analysiert.

Aus dieser Analyse läßt sich schließen, daß die Veränderung des "Wahren Jacob" vom nach außen gerichteten zum nach innen gerichteten Medium der veränderten Organisation der Partei zeitlich vorausging. "Der Wahre Jacob" hatte Erfolg nur in der frühen Zeit der Reproduktionstechnik, die der Periode der propagandistischen Partei entspricht. Zwar hatte "Der Wahre Jacob" im Jahre 1912 die größte Auflage, aber damals hatte er bereits seine nach außen gerichtete Rolle beendet. Deshalb nahm die Zahl seiner Abonnenten rasch ab. Mit dem Aufkommen des Zeitalters der Massengesellschaft führte die SPD in ihre politische Umgebung ein Massenkommunikationsmittel ein, das den traditionellen Bildungsvorsprung des Bürgerstandes nivellierte. Danach eröffnete die SPD, die erst die Propaganda als Massenkultur schuf, einen neuen Horizont der Massenpolitik.